

令和2年度 学生による地域活性化プログラム

権 五景(楽九)ゼミナール活動報告書

十分杯で長岡を盛り上げよう!

— 動画で伝えたい 十分杯と長岡の魅力! —



06

令和2年度

ごあいさつ



長岡大学 学長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、3、4年次の専門ゼミナールに所属する学生グループが、地域の課題解決や魅力創出に向けた調査研究と具体的な取り組みを行うことにより、学生の職業人としての基礎的能力の向上と地域活性化への貢献を目指すプログラムです。本プログラムは、平成19（2007）年度の導入から現在まで十数年に渡り継続し、発展してきた本学の特徴的な教育プログラムの一つであるとも言えます。最近では、取り組みの中心である学生の諸活動を新聞やテレビ、ラジオ等のメディアでも取り上げていただく機会も多くなりました。また、これまで本プログラムの運営に多大なご協力をいただいていた地域連携アドバイザーをはじめ地域の多くの皆様から、各取り組みテーマへのお問い合わせや激励のお言葉をいただいております。長きにわたりこの取り組みを続けて来られたのは、ひとえに地域の皆様の暖かいご支援とご指導の賜物と、心より感謝申し上げます。

「地域活性化とは何か」という問いに対する明確な答えを述べることは難しいと思いますが、本プログラムでは、答えの無い様々な地域課題に対して、それらの課題の原因をどのように捉え、どのように行動を起こして対応して行くのかを学生が自ら体得することができます。本学を卒業後に地域社会の一員となる学生が、将来このような地域課題に対して日々取り組むことになると考えると、これらの体験は彼らにとって大変貴重なものとなることでしょう。

本プログラムでは、各ゼミナールで設定したテーマの下で学生グループが活動を進めて行くこととなりますが、時には学生同士のちょっとしたすれ違いや一緒に活動する地域の大人たちとの意見の食い違い等が起きることもあります。このような体験も学生がさらに一歩、人として成長するためのきっかけとなります。ゼミで決めたテーマをまとめ上げるために、どのように他者とかわりながら取り組みを進めて行くべきなのか、この取り組みの中で自分の役割は何であるのか、などを考えながら活動を行っていくことで、チームで活動することの難しさだけでなく、チームで目標に向かって何かをやり遂げることの充実感や達成感を味わうことができます。

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域に飛び込んで地域の皆様と一緒に汗をかき、考え、そして楽しむ中から、目先の地域貢献活動だけでなく、将来にわたって地域の活性化を担っていく事のできる人材の育成を目指しております。本学の建学の精神は、「幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進」と「地域社会に貢献し得る人材の育成」です。本プログラムは、まさにこの精神を実現するための中核となる教育プログラムであると言えます。

令和3年3月



長岡大学は、文部科学大臣の認証を受けた『公益財団法人日本高等教育評価機構』により、平成28年度大学機関別認証評価を受審し、平成29年3月7日、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしていると「認定」されました。

はじめに

十分杯で長岡を盛り上げよう！ — 動画で伝えたい 十分杯と長岡の魅力！ —



長岡大学教授／ゼミ担当教員 権 五景（樂九）

私事ですが、仏教の教えにはまりつつあります。仏教では、人の苦しみや悩みのもとは無明（無知）と過ぎた慾にあると言います。この過ぎた慾を戒める道具として、十分杯以上わかりやすい物はないと思います。誰にも必要な物だと思えます。特に近年、平和が長く続き、グローバル化で物余りの時代になっている現在、人間の慾には限度がないように見えます。物に頼る幸福感は時間の経過とともに減退していくために、新たな物を欲しがります。そのため、満足することができなくなってしまいます。所謂苦楽間の輪廻です。このような慾による輪廻の連鎖の人生であるため、一度だけの人生が歳を重ねても悩みと不安だらけになります。十分杯は自分の心の中の過ぎた慾を戒めてくれるので、以前よりは心を楽しんでくれます。息子の成績が多少下がっても、家内の料理が期待通りでなくても、つまり、慾どおりでなくても十分杯の教えがあれば息子にも家内にも満足することができます。自分の慾に引きずられ、息子や妻を憎む愚かさから解放され自由になれます。私を以前よりはるかに幸せにしている十分杯を多くの方々に知っていただきたいと思えます。

さて、今年度の目玉の活動は、動画づくりです。昨年度中にアドバイザーの方から動画づくりを試みたらどうかというアドバイスがあったのが始まりです。それにコロナが来ました。8月になってやっと顔を合わせながら動き出すことができました。7月までは、昨年度まで並行していた酒粕の活動をどうするかをめぐり、議論を重ね現在の人数では困難であり、一つだけでも成果を出せるように方向を定めました。十分杯一本で行うことで決めました。もう一つは、十分杯の江戸時代の発音がじゅうぶん「はい」か、「ばい」かということでした。因みに広辞苑には両方載っていますが、「は」行の発音を調べていくと、産婦人科のように近代に入ってきた言葉は「はい」で、それ以前からあった言葉は「ばい」であることがわかりました。確認のしようはありませんが、恐らく江戸時代は「じゅうぶんばい」として発音されていたのではないかと推測するようになりました。

8月から動画づくりにとりかかったのですが、意欲はあったもののハードルは我々の想像以上に高いところがありました。そこで、以前から「越乃シュクラ」を通して交流があった長岡観光コンベンション協会に相談したところ、適任者を紹介してくださいました。それ以降何度か打ち合わせを行い、酒蔵への取材を行いました。「密防止」のため、最小人数で動きました。編集作業は非常に大変でした。しかし、その中でもゼミ生たちは編集ソフトをかなり使えるようになりました。誉めてあげたいです。近い内に動画サイトで十分杯がたくさん見ていただけるようにしたいと思います。

しかし、少人数でありながらもコミュニケーションがうまく取れない課題もありました。今年度の経験を是非社会に出て活かしてほしいと思えます。丈夫な木は厳しい冬を経験するからこそなるものだとされています。きっと丈夫な気になると確信しています。

大手通りの市民センター1階で行われていた太刀川喜三様の十分杯展示会で出会って10年が経ちました。それ以降、長岡歯車資料館長の内山弘様のご指導の下で、知足十分杯（枡）を製作することができました。また、(株)長谷川陶器と協力して長岡らしい米百俵十分杯を作ることができました。最終的には我がゼミオリジナルの十分杯を長岡の土産物として販売するようになりました。

最後に、本学十分杯コレクションの自慢をしたいと思えます。世界最高峰の工芸博物館であるロンドンの Victoria & Albert Museum にもサイフォンカップがあることはありますが、たった2点だけです。しかし、長岡大学には40点以上のサイフォンカップがあります。どれもがユニックで芸術性も高いです。是非ともご覧いただきたいと思えます。

令和3年3月

権五景
ゼミナール

十分杯で長岡を盛り上げよう！



【参加学生】 6名(4年生4名、3年生1名、2年生1名)

4年生 五十嵐凌、高尚、齋藤克裕、藤田步乃香

3年生 阿部滉平

2年生 長部康平

【アドバイザー】

株式会社長谷川陶器 代表取締役 長谷川真 氏

魚沼市役所北部事務所 主事 中澤 司 氏

取り組み概要

長岡市に古くから伝わる戒めの盃「十分杯」を用いて、より長岡市を魅力的な街にするために日々活動しています。「十分杯を知っているよ」との声も増えてきていると感じている中、これまで以上に取り組みに力を入れていき、「長岡=十分杯」というように長岡市の魅力と十分杯をより密接にするべく活動を行っています。

活動風景



今年度の主な活動は、長岡の自慢である「十分杯と日本酒をPRするための動画づくり」でした。酒蔵を訪問して取材を行う中で改めて長岡の自慢としての日本酒のすばらしさを確認することができました。ゼミ生は全員動画編集ができるようになりました。

また、第2回 Hakkotrip にも参加しました。

地域資源事例探し

権ゼミナールは十分杯を地域資源として位置付けて活動してきましたが、その理由は世界中で発展している地域の共通点として地域資源が有効活用という共通点を見つけたからです。今年度は、羊の活用事例として、テニスラケット、バッグパイプ(楽器)、砂漠の水入れ、チーズ作り道具、スーツなどの衣類品、いかだを見つけ出すことができました。

十分杯で長岡を盛り上げよう！

—動画で伝えたい 十分杯と長岡の魅力！—

権 五景ゼミナール

4年	17K006	五十嵐 凌	17K047	高 尚
	17K059	齊藤 克裕	17K096	藤田 歩乃香
3年	18K005	阿部 滉平		
2年	19K022	長部 康平		

目 次

1. 序章 - 報告書の作成にあたって	1
1.1 権ゼミナールの基本的な考え方・活動目的	1
1.1.1 イギリスの羊活用事例	1
1.1.2 中国の羊活用事例	3
1.1.3 Babolat 並びに Wilson の事例	8
1.1.4 楽器の事例	10
1.1.5 イランの羊活用事例	11
1.1.6 羊について	12
1.1.7 上記事例についての分析	14
1.1.8 日本の事例	14
2. これまでの活動	17
2.1 過年度のみの活動	17
2.1.1 東北中学校訪問授業	17
2.1.2 観光列車越乃 Shu * Kura	18
2.1.3 長岡酒の陣	19
3. 今年度の活動	20
3.1 HAKKOtrip	20
3.2 十分杯発音調査	22
3.3 原理の実験	24
4. 十分杯 PR 動画作成	25
4.1 動画作成の経緯	25
4.2 学生のみでの動画作成	25
4.3 動画作成に協力して下さった方々	27
4.4 PR 動画作成の打ち合わせ	27
4.5 取材	29
4.5.1 柏露酒造	29
4.5.2 お福酒造	30
4.5.3 株式会社長谷川陶器	32
4.5.4 わがんせ	32
4.5.5 長岡藩主牧野家史料館	33
4.5.6 長岡市郷土史料館	34
4.5.7 ぽんしゅ館	34
4.6 最初の躰き	35
4.7 取材を終えて	36
4.8 編集作業	37
4.8.1 動画の目的	38
4.8.2 編集での反省	38
4.8.3 成果発表会へ向けて	39
5. 今後の活動	39
6. 今年度の活動を振り返って	40
7. 結びに変えて	40
補論. 十分杯とは	41
引用・参考文献	44

1. 序章-報告書の作成にあたって-

1.1 権ゼミナールの基本的な考え方～私たちの考え方と活動目的～

私たち権ゼミナールは、「経済発展は地理的特性と文化的特性から離れることはできない」という命題のもとで長岡地域の経済発展に貢献したいという思いを持ち、十分杯の活動を続けてきた。昨年度の報告書では、この命題を裏付ける世界の事例に加え、日本の事例についても紹介した。今年度は、羊という地域資源に絞ったいくつかの世界の事例と、新潟県の代表的事例の1つを紹介したい。

1.1.1 イギリスの羊活用事例

羊の活用事例については、中国とイギリスの事例を一昨年の報告書で紹介した。しかし、昨年度、今年度と活用事例を探す中、異なる地域において新たにいくつかの活用事例を見つけることができたためそちらも紹介したい。

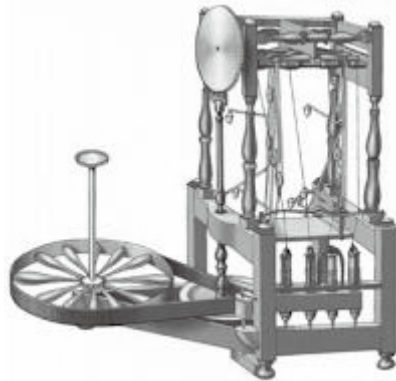
まずは、一昨年も紹介した2つの事例について改めて述べる。1つは、イギリスのスーツである。現在もブリティッシュ・スタイルと呼ばれ、世界中で人気の高いスーツである。〈図1〉は、1769年にイギリスの発明家リチャード・アークライトによって発明された水力紡績機である。アークライトの紡績機は動力に水力を用いることで、より丈夫な糸を紡ぐことが可能となり、紡績の工業生産を加速させた。実際にアークライトは、イングランド西北部にある行政区域であるランカシャーにて紡績工場を設立し、紡績の産業化に成功した。皮肉なことに、特許の申請を却下されたために、水力紡績機は広く普及していくことになったという。この紡績機をきっかけに、また新たな紡績機が発明され、イギリスでは織物業がさらに発展していくことになる。¹⁾輸出用の綿織布も多く生産されるが、加えてイギリス人自身が日常的に着るウールの生産が活発になった。なぜ日常的にウール素材の服を着ていたかという点、イギリスが主な貿易相手としていたアメリカやアフリカなどと異なり、綿や麻の通気性の良い生地では寒さを凌げなかったためである。加えて、羊の飼育が盛んであり、羊毛が入手しやすい環境に合ったことも大きな要因となったであろう。そして、ウールを大量生産できるようになり、イギリスはウール素材のスーツを世界中に輸出することによって益々の経済発展を果たしたのである。

イギリスの人々がウール素材のスーツを着るようになったのは、その文化も関連する。スーツの起源は16世紀にまで遡るといわれ、フロック (Frock) と呼ばれるヨーロッパの農民が農作業や外出の際に着用した丈の長い服である。このフロックが、上質な素材と洗練された仕立てを施されることにより、フロックコート (Frock Coat) と呼ばれる一般市民の外出着に進化していったという。同じ頃、フロックコートにシャツ、パンツ、ベスト、ネクタイを合わせるスタイルが英国紳士の正装として確立する。その大きな要因は、ロンドン中心街にあるサヴィル・ロウ (Savile Row) という街にある。サヴィル・ロウは軍の関係者やその家族の居住エリアであり、上流階級の人々が多く住んでいた。よって、貴族や軍人など裕福な層をターゲットにした服飾店がこの街に数多く出店していたことから貴族にこのスタイルが広まっていったのである。

¹⁾ 『世界史の窓』 <https://www.y-history.net/appendix/wh1101-021.html>

その後、乗馬用に燕尾服、散歩用のモーニングコートなど用途に合わせて進化と遂げていく。これらを貴族が好んで着ていたことから、一般庶民にも礼服として認識されるようになった。そしてその洗練されたスタイル、皆で同じ服装をすることで芽生える「仲間意識」の効果が世界中に受け入れられ、共通の正装として広まっていったのである。²⁾つまり、現在、万国共通の正装であるスーツは英国の貴族文化に大いに影響を受けたと言える。

<図1> 世界初の工業用紡績機



(出所) 『12-13 2 Discoveries and Inventions』

<https://sites.google.com/site/12132discoveriesandinventions/water-powered-inventions>

<図2> 18世紀のフロックコート



(出所) 『DAKS JAPAN』 <https://daks-japan.com/englishinfo/495/>

²⁾ 『DAKS JAPAN』 <https://daks-japan.com/englishinfo/495/>

<図3>老舗ブランド「デュージ&スキナー」のスーツ



(出所)『VOKKA』 <https://vokka.jp/13066>

1.1.2 中国の羊活用事例

続いて、中国における羊の活用事例を紹介する。<図4>は、羊の皮で作られた筏であり、黄河上流にある甘肅省蘭州市で生み出された。かつて1950年代は黄河に架かる橋がなく、鉄道や道路などの交通手段もなかったため、黄河を渡るための船が必要だった。しかし、蘭州市は乾燥地帯であり、森林には恵まれない地域であった。そのため、人々が生み出したのがこの羊の皮で作った筏である。構造は<図4>を見れば簡単であることがわかるが、完成に至るまではかなりの工程を経ている。まず、羊の頭からつま先までを剥ぎ取り、剥ぎ取った皮を日光で乾かす。そして毛をそり落とし、水に浸すなど36のプロセスを行うことで、皮の加工が完了する。その後、皮の四本の足と両端の口の部分をしっかりと結いつけ、空気を吹き込んで、風船のように膨らませて浮き袋とし、木枠にくくりつけるのである。その他に、日々のメンテナンスとして、皮の腐食や乾燥によるひび割れを防ぐために、月に1度、皮に油と塩水を入れるのだという。³⁾

<図4>のように人や少量の貨物を運ぶものは十数匹の羊を使用したものであるが、長距離用で大量の貨物を運搬する際には、千匹ほどの羊を括り付けた筏が使用されたそうである。その筏は何十トンもの貨物を運ぶことができたそうだ。⁴⁾

羊皮筏によって、当時の人々は問題なく生活をしてきたが、1960年代に入り交通が発達するにつれ、羊皮筏は徐々に減少していった。しかし、現在になってまた注目され始め、観光商品として使用されているという。中国の黄河上流に位置する地域に旅行に行けば、今もこの筏で黄河を渡ることができるようだ。

³⁾ 『人民中国』 http://www.peoplechina.com.cn/guangang/2013-11/13/content_577950.htm

⁴⁾ 『人民中国』 <http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/wenhua/tradition/200201.htm>

<図4>羊皮の筏



(出所)『中国駐大阪観光代表左処』<http://www.cnta-osaka.jp/spot/culture/lanzhou-the-raft-of-the-yellow-river-sheepskin-bag?attraction=250>

羊皮筏は、上記で 36 のプロセスを経て作られると述べた。私たちはその作成手順を調べたが、日本語の本やインターネットサイトでは詳しく語られているものを見つけることができなかった。そのため、ゼミナールの中国人留学生の協力を仰ぎ、中国の動画サイトで詳細な作成手順について述べている動画を紹介してもらった。さらに、留学生に日本語に直してもらうことで、ようやく羊皮筏の作成手順を理解することができた。正確には、その動画で述べていたのは、羊ではなく山羊を使った筏の作成方法であったが、羊と山羊では大きな違いはないだろう。その手順とは以下である。

- ① まず筏にする山羊を選ぶ。皮が厚いという理由から、三歳以上の牡山羊が好ましい。
- ② 山羊を殺し、首と前足、後ろ足の四足の足首を切る。
- ③ 皮を剥がしやすくするため、後ろ足の肉と皮の間にある膜に箸を入れる。

<図5>③の様子



(出所) 中国検索サイト baidu で「羊皮筏子制作过程，用嘴吹气，太厉害了」というキーワードで検索して表示されたサイト。

- ④ 先ほど箸を入れた隙間に空気を吹き込む。

<図6>④の様子



(出所) <図5>と同じ

- ⑤ 皮と肉をよく分離させるため、空気を入れると同時に山羊の腹を軽く叩く。叩くことで、空気を前に移動させ、隙間を広げていく。

<図7>⑤の様子



(出所) <図5>と同じ

- ⑥ 後ろ足の毛が長い部分からナイフで切る。
⑦ 前足は空気を入れる際使うため、残しておく。

- ⑧ 後ろ足は必要ないため、皮がついたまま完全に切ってしまう。

<図 8> ⑧の様子



(出所) <図 5>と同じ

- ⑨ 首と尻、前足は残しておく。
⑩ 皮を剥がすとき、一方の手で皮を掴み、もう一方の手で拳を作り皮と肉の間に入れる。筋はナイフで切る。

<図 9> ⑩の様子 1



(出所) <図 5>と同じ

<図 10> ⑩の様子 2



(出所) <図 5>と同じ

- ⑪ 分離した皮は、ぐるぐるに巻いてビニール袋に入れ、密封する。

<図 11>⑪の様子



(出所) <図 5>と同じ

- ⑫ そのまま二日間放置する。
⑬ 作った皮に空気を入れる。
⑭ 皮表面の毛を髭剃りのようなもので剃り落とす。

<図 12>⑭の様子



(出所) <図 5>と同じ

⑮ 最後に防腐のために皮の中に、大量の塩水とごま油を入れる。

<図 13>⑮の様子 1



(出所) <図 5>と同じ

<図 14>⑮の様子 2



(出所) <図 5>と同じ

以上で完成である。作りは簡単であるが、いくつもの繊細な手順を必要とする。そのため、熟練の技術が必要だということが見て取れる。羊皮筏は知恵と技術力の結晶といえるだろう。

1.1.3 Babolat 並びに Wilson の事例

羊を活用した事例としては、テニスラケットも挙げられる。テニスラケットのうち、動物の腸をガットに用いたものはナチュラルガットと呼ばれ、現在販売されているナチュラルガットのラケットは、牛の腸を用いたものが一般的である。しかし、ナチュラルガットの始まりは羊の腸を用いたものであり、近代テニスが確立された 1874 年の 1 年後、1875 年にフランスに本社を置く、バボラ (Babolat) によって発明された。その後、1877 年に開催された第一回ウインブルドン選手権にも用いられるなど、テニスの創成期を支えたラケットである。⁵⁾

5) 『テニスの学校』 <https://tennis-gakko.info/gear/g010>

羊を用いたナチュラルガットの先駆者となったバボラ社であるが、そもそもは、スポーツ用品を製造する企業ではなかった。元々は、羊の腸を加工する技術を持ち、ケーシング⁶⁾、手術用糸、楽器の弦、アーチェリーの弦などを製造していた。⁷⁾その技術を利用し、テニスラケットの製造を開始したバボラ社はやがてラケットのフレームを含めた、ラケットの部品全てを自社で製造するようになり、自社ブランドを確立した。そして今やプロテニスプレーヤーも使用するスポーツラケットメーカーとして揺るぎない人気を確立している。大企業に成長したことで、地域としても大きな利益を生んでいることが想像できる。

続いて、スタートは羊の活用ではなかったが、廃棄されてきたもので発展を遂げた興味深い事例を紹介したい。ウィルソン (Wilson) という企業は、アメリカシカゴ州に本社を置くスポーツラケットメーカーであり、その前身はシュバルツチャイルト & ザルツバーガー社 (Schwarzchild and Sulzberger) という精肉業を営む企業であった。精肉後に出る筋や皮を有効活用できないかと設立されたのが、アシュランド・マニュファクチャリング社 (Ashland Manufacturing Company) という企業である。この企業では、筋や皮を活用するべく研究を重ね、その結果生み出されたのがテニスラケットのガットである。その後、アシュランド社は本格的にスポーツ用品業界に進出するため親会社から独立し、1916年に銀行に買収されたことをきっかけに、ウィルソンと社名を変えた。⁸⁾品質を追求していく中で、筋や皮を利用したラケットは製造されなくなったが、今やバボラと同じくプロスポーツ選手も使用する人気ブランドとして地位を確立している。

<図 15> Babolat 社 ナチュラルガット製造の様子



(出所) 『Rue89Lyon』 <https://www.rue89lyon.fr/2015/06/05/tsonga-roland-garros-cordage-boyaux-vache/>

6) ソーセージの表皮部分。主に動物の腸を用いる。

7) 『Babolat』 <https://www.babolat.com/jp/about-us/our-history.html>

8) 『Wilson』 <https://www.wilson.co.jp/history/>

1.1.4 楽器の事例

次に紹介するのは、楽器に羊を活用した事例である。まずは、バグパイプ (bagpipe) という楽器の事例を述べる。バグパイプと言われて多くの人が真っ先に思い浮かべるのは、スコットランドのグレート・ハイランド・バグパイプ (Great Highland Bagpipes) であろう。スコットランドの伝統衣装であるキルトを身にまとった男性たちが行進曲を奏でながら、街を歩く光景はとても印象的であり世界中に広く伝わっていることから、バグパイプはスコットランドの伝統楽器であると認識されているが、様々に名前を変え、同じ構造の楽器は世界中に存在する。また、一部を除いてこの楽器の袋部分は羊または山羊の皮を用いており、装飾は様々であるがほぼ同じ楽器であると言える。中国の筏同様、内臓を取り除いた羊の皮で袋を作り、そこに息を吹き込んで音を出すのである。調べたところ同じ構造の楽器は世界に 25 種類あり、地域としてはヨーロッパ、中東、西アジア、南アジア、北アフリカに分けることができた。⁹⁾おそらく始まりはヨーロッパであり植民地化されていた国々に伝わったことから独自の進化が遂げられたものと思われる。ただ共通しているのが、合成皮革が開発される以前は羊または山羊の皮を用いているという点であり、この楽器が伝わる地域は羊、山羊などの動物を飼育していた地域である。よって、このバグパイプも地域資源を有効に活用した事例であると言えよう。

<図 16>ギリシャのバグパイプ (ツァンブーナ)



(出所)『Florida Memory』<https://www.floridamemory.com/items/show/108680>

次に、弦楽器に羊を活用した事例を述べたい。弦楽器とは胴体に張られた弦の振動によって音を出す楽器のことで、代表的なものにはバイオリンやチェロなどがある。弦楽器の弦の部分に羊の腸を用いたものをガット弦と言い、現在主に使われるスチール弦やナイロ

⁹⁾ 『私家版 楽器事典 / 楽器図鑑』https://saisaibatake.amezaiku.com/musical/instruments_bagpipe_world.html

ン弦が開発される前は、ガット弦が主に使われていた。しかし、1914年第一次世界大戦勃発後、負傷者が大量に発生し、当時傷口の縫合に使われてた動物の腸は需要が高く貴重なものとなった。当時縫合糸の生産が優先され、ガット弦の素材である羊の腸が不足したことを受けてスチール弦が開発され、広く普及していくこととなった。¹⁰⁾

それぞれ弦の特徴としては、スチール弦やナイロン弦が力強いしっかりとした音を出すのに対し、ガット弦は柔らかい穏やかな音を出す。どちらの音にも魅力があり、1920年代頃演奏家の間では優劣の論争が繰り広げられたが、耐久性の面でスチール弦やナイロン弦が優れていたため現在は、そちらの方がより人気があると言えるだろう。¹¹⁾ただ、現在もガット弦は高価で販売されるほど根強い人気がある。

1.1.5 イランの羊活用事例

世界の事例として最後に、イランの事例を紹介したい。〈図7〉は、イランの山岳地帯に住む人々がバターを作っている様子である。遊牧民をルーツに持つカシュガイ族は、主にイラン南西部に暮らし夏と冬の2回ほど住みやすい地域に移動する、遊牧民として生活している。羊や山羊とともに暮らし、その肉を食べ、乳を搾ってチーズやバターを作っているという。その際、使われているのが〈図7〉にあるマシュク（ماشک）と呼ばれる昔ながらの道具である。¹²⁾羊または山羊の皮に、ミルクを入れて左右にひたすら振るという原始的な道具であるが、現代的な環境にない遊牧民の人々にとってはバターやチーズは貴重なたんぱく源であるため、この道具は遊牧民にとって非常に重要な道具である。

〈図17〉羊の皮でバターを作る様子



(出所) 『ART GABBEH』 <https://artgabbeh.com/blog/gabbeh-2018-july-28/>

¹⁰⁾ 『池尻弦楽器工房』 <https://rearpond.mystrikingly.com/blog/9ea417fb084>

¹¹⁾ 『ヤマハ株式会社』

https://www.yamaha.com/ja/musical_instrument_guide/violin/trivia/trivia004.html

¹²⁾ 『ART GABBEH』 <https://artgabbeh.com/blog/gabbeh-2018-july-28/>

日本でも知名度があり、世界中で人気のあるペルシャ絨毯もウールを素材に使用していることからイランの地域資源活用事例と言えよう。美しさが注目され、手織りで製作したものは専門店、オークションなどで高値が付けられるペルシャ絨毯であるが、イランでは家庭の必需品として扱われている。家に広げて敷き、靴を脱いでこの絨毯の上で生活しているのだそうだ。

絨毯の図柄で多いものは茎の形状がカーブした花のデザインであるが、人や動物を描いたものもしばしば見られる。他のイスラーム地域や国では偶像崇拝を禁止するイスラームの教えがあり、人や動物を描くことは好まれないが、イランではさほど意識されず古くから伝統的なものとして絨毯のデザインとして用いられている。また、絨毯に使われる色はそれぞれ意味があり、白が悲嘆、黒が破壊、オレンジが敬虔、赤が幸福や富、茶色が豊穡を示している。

第二次世界大戦後、イラン政府は絨毯の製造を民族文化として奨励し、特にヨーロッパ市場へ多く輸出した。イラン革命後、宗教指導者たちによって輸出が大幅に減らされることになったが革命後の混乱を経て、1984年からは外貨獲得の手段として絨毯を輸出する方針へと変わっていく。それにより、日本でも東京の銀座や六本木などに高級絨毯を扱う専門店が進出している。イランにとって絨毯は石油以外で外貨を獲得できる重要な産業なのである。¹³⁾

<図 18> ペルシャ絨毯



<図 19> イランのペルシャ絨毯専門店



(出所) 左 『ペルシャ絨毯専門店』

<https://www.ariya-carpet.co.jp/shop/product/view/18/3077.html>

右 『ペルシャ絨毯専門店ギャラリー』

<https://persian-carpet.net/buying-to-the-iranian-market/>

1.1.6 羊について

上記で紹介したように羊の活用事例は世界各地で見られる。紹介した地域は古くから羊の飼育が盛んであり、羊の存在が身近にあり豊富であったため活用することができたのである。『世界のヒツジ飼育数 国別ランキング・推移』(<https://www.globalnote.jp/post-15233.html>)の2018年のデータによると、羊の飼育数が多い国として、1位中国、6位イラン、7位イギリス、45位フランス、52位アメリカと、事例を挙げた国々は総じて上位に

¹³⁾ 宮田 (2002) pp.32-34.

ランクインしている。ちなみに日本は、153位と比較的下位にランクインしていた。もし日本が羊の飼育頭数が多い、秀でた地域であったら、日本にも羊を活用した商品などが多くあったかもしれない。

では、羊の飼育頭数が多い国の特徴は何だろうか。牛や馬のように当然羊にも種類があり、その種類によって適した地域があるだろうが、飼育頭数ランキング上位の国と下位の国には、明確にどのような違いがあるのだろうか。

まず、ヒツジの飼育頭数が多い地域は、元来、羊が多く生息していた地域であり、古くから羊を家畜として重宝していたと考えられる。羊の歴史をたどっていくと、ヒツジ属は家畜化される前、平野部に広く分布する種と、山地、高地、丘陵地¹⁴⁾に生息する種が存在した。各種野生のヒツジの分布範囲は、かつて中央アジアからヨーロッパのイギリスやフランスまで、南方では北アメリカまで広がっていた。人間によって生息範囲が狭められてゆくにつれ、平野部に棲む種も山地や高地、丘陵地に移動していったことから、ヒツジの野生種は山地性の動物となった。ヒツジを最初に家畜化したのは、近東¹⁵⁾の東アジア側および中央アジア側の外縁部だという。¹⁶⁾そこからヨーロッパに家畜化の文化が伝わっていったと考えると、現在の飼育頭数が多い国と合致する。羊はこれらの地域に適している、これらの地域が羊にとって住みやすい環境であったのであろう。

そもそも、羊を家畜として飼い始めたのは、草を食べ、群れを成して移動していた羊が必要な時に食糧にできるためであり、人間は羊と移動しながら生活するようになっていき、これがやがて羊の放牧に発展していった。人間はこのように、それぞれの土地の気候や暮らしに合った動物を家畜にしていった。例えば、暑さの激しい砂漠などではラクダ、険しい山地ではラマやアルパカが家畜として重宝されている。その点、羊は極端な暑さ、寒さのない地域であり草が生える土地ならばどこでも飼育できる動物である。つまり、飼育頭数上位の国と下位の国の違いとは、土地、気温が大きく影響していると言えるだろう。また、膨大な草が必要なことは言うまでもない。羊は子羊であっても、1日5kg、大人になると1日10kgほどの草を食べるそうだ。そのため、草地に恵まれた広大な場所でなければならない。

その点を考慮しても、羊は手がかからず、飼育しやすいと言えるだろう。日本の場合、羊よりも牛や豚、鶏のほうが食料として重宝されたという事情もあるが、環境的には羊を飼育するのに何の問題もないということになる。

それに、日本の国土のうち約70%は森林や原野だが、家畜を飼うのに利用されているのはわずかである。人間が草刈りをするくらいなら、羊を飼育し、雑草を食べてもらうほうが効率的かもしれない。成功すれば、日本国内でもウールや羊の肉が名産になる可能性はある。

羊という動物は古くから、いろいろな面で人間を助け、多くの地域が羊のおかげで豊か

¹⁴⁾ なだらかな起伏や小山（丘）の続く地形のこと。

¹⁵⁾ ヨーロッパから見て東にある国々の内、それほど離れていない地域を指す。

¹⁶⁾ E・アイザック、山本・田林・桜井（訳）（1985）pp.107-110.

になることができたのだ。¹⁷⁾

1.1.7 上記事例についての分析

さて、上記では羊を活用した事例をいくつか述べたが、これは2つの分類ができる。1つは、羊を活用して生活に役立てた事例、そして2つ目は、羊を活用して経済的に豊かになったという事例である。決して羊を活用すれば、地域が豊かになるというわけではない。なぜ、同じ羊という動物を利用しているにもかかわらず、経済的に豊かになる地域と、生活に役立つという一点に留まる地域、という差が生じてしまうのか。

同じ素材を使って物を作り、他者に評価されるものと、評価されないものの違いを考える。まずは、質の良し悪しによるところが大きい。しかしそれ以上に、異なる物を作っていれば、当然、その物が必要な者とそうではない者が存在するだろう。必要な者はその物を高く評価し、求める。必要ではないと感じる者は評価しない。羊の事例もそういった単純な違いから差が生じているのだろう。

つまり経済的に豊かになった地域は、ただ活用したのではない。偶然か予測に基づいてかは不明であるが、多くの人が必要である、魅力的であると感じるものに羊を活用したのである。

1.1.8 日本の事例

次に、日本の事例を紹介したい。もちろん日本の事例にも様々なものがあるが、今年の報告書では新潟県の代表的な事例、「米菓」について紹介する。

米菓とはその名の通り米で作ったお菓子を指す。あくまで米で作ったお菓子の総称であり「米菓」という名前のお菓子はない。また、米菓は原料により製造工程が異なり特徴も違う。その中でも最も大きな違いは米であり、米菓に用いる米はもち米、うるち米の2種類である。もち米から作られるものは、①あられ（主として小型のもの）、②おかき（主として大型のもの）、③揚げ餅（油で揚げた餅に味付けしたもの）があり、うるち米から作られるものは、せんべい類がある。せんべい類の中にはさらに、焼きせんべい、揚げせんべいがあり、焼きせんべいには細かな分類として、①草加型（かため）、②新潟型（ソフト）、③ぬれせんべいがある。¹⁸⁾

そんな米菓で全国的に評価が高いのは、新潟県である。スーパーやコンビニで販売されている米菓の多くは新潟の企業が製造元となっている。以下の表は、2019年度米菓メーカー売上高ランキングである。所在地を見ると新潟県の企業が上位10社中、6社を占めている。この表から分かるように米菓は新潟県の名産品である。地元民だけでなく、全国的に人気のある新潟県の米菓は、同じく新潟の名産である、日本酒などと並んで土産物店にて販売されていることが多い。日本酒は好み、年代を選ぶお土産だが、米菓は老若男女誰にでも贈ることができるため新潟県定番のお土産として認識されているように思う。

¹⁷⁾ 加藤（1991）

¹⁸⁾ 『あられ おせんべい』 <http://www.arare-osenbei.jp/type.html>

<表 1> 2019 年度米菓メーカー売上高ランキング

単位：億円

順位	社名	所在地	売上
1	亀田製菓	新潟	770
2	三幸製菓	新潟	558
3	岩塚製菓	新潟	224
4	もち吉	福岡	222
5	栗山米菓	新潟	200
6	ぼんち	大阪	102
7	小倉山荘	京都	98
8	天乃屋	東京	72
9	アジカル	新潟	67
10	越後製菓	新潟	61

(資料) 岩塚製菓株式会社 (2020) p.37 をもとに再作成。

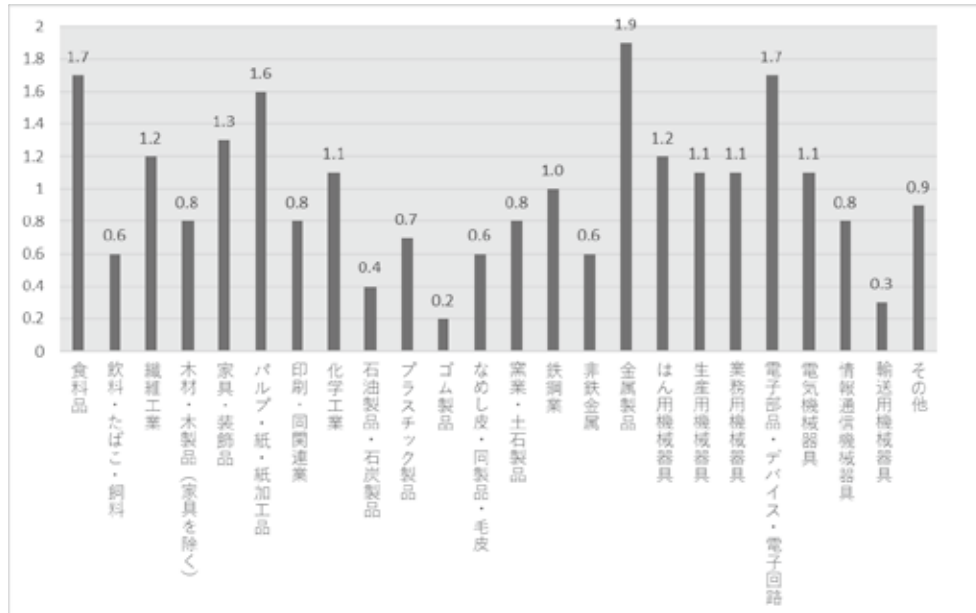
(注) 越後製菓は米菓のみ

また、全国的な評価のみならず、県内の産業と比べてみても米菓産業は優れているということがわかる。まず、<図 10>は、新潟県の食品加工産業の集積度合いを特化係数¹⁹⁾を用いて同県内の他の産業と比較している。食料品から伸びる棒グラフを見ると、1.7 と金属製品の 1.9 に次いで 2 番目の値である。新潟県内に食料品産業が多く存在し、その分付加価値もついていることを表している。

次に食料品製造業のそれぞれの項目について同じやり方で比較を行っているが、<図 11>に示されているように、米菓製造業が 29.2 と断トツで秀でていることが見て取れる。<図 11>のグラフから、新潟県に米菓産業が集積しており、米菓に高い付加価値がついていることが分かる。また、米菓が新潟県にとって特出して大きな存在であることを表している。

¹⁹⁾ 特化係数とは、地域の付加価値構成比を日本全体の付加価値構成比で割った数値。相対的な産業集積度合いを示す。他にも、就業者構成比や生産高構成比などを基に求める方法がある。

<図 20>新潟県 製造業の特化係数（付加価値構成比ベース）

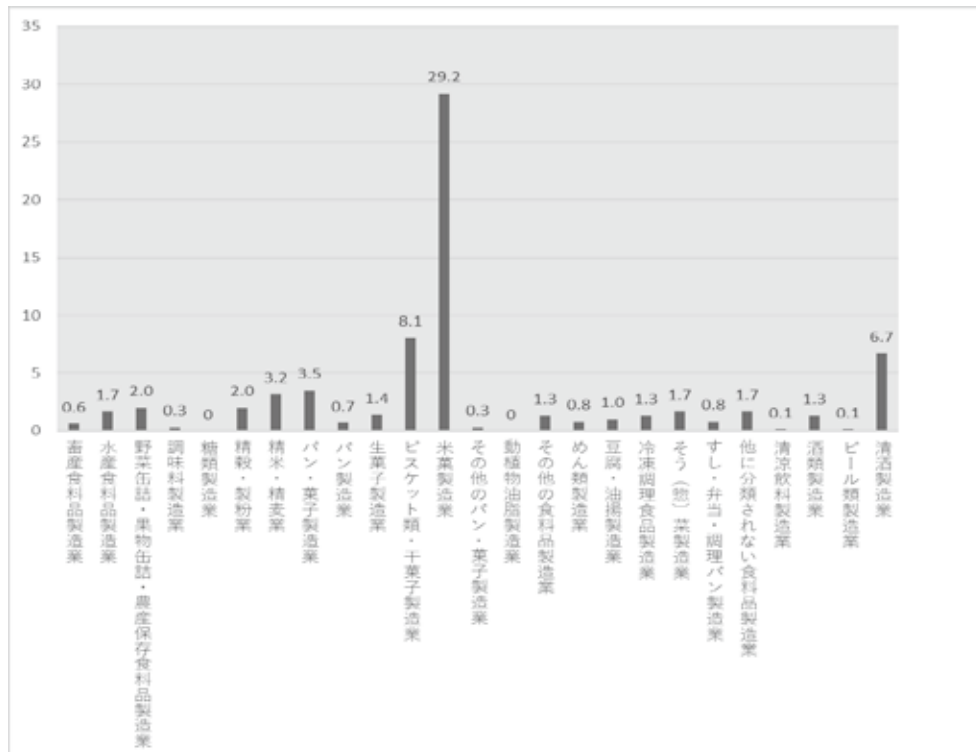


（資料） 日本政策投資銀行新潟支店（2016）p.3をもとに再作成。

（注）特化係数とは、地域の付加価値構成比を日本全体の付加価値構成比で割った数値。

相対的な産業集積度合いを示す。他にも、就業者構成比や生産高構成比などを基に求める方法がある。

<図 21>新潟県「食料品製造業」構成産業の特化係数（付加価値構成比ベース）



（資料） 日本政策投資銀行新潟支店（2016）p.3をもとに再作成。

（注）特化係数とは、地域の付加価値構成比を日本全体の付加価値構成比で割った数値。

相対的な産業集積度合いを示す。他にも、就業者構成比や生産高構成比などを基に求める方法がある。

米菓が新潟県の名産になることができたのは、やはり新潟県が全国有数の米どころであるということが大きな要因である。そのため、米菓のみならず切り餅などの同じく米を原料とした加工食品が全国的に大きなシェアを占めている。米を育てるのに適した土地の条件とは、①水が豊かであること、②広くて平らな土地であること、③水はけのよい土地であること、④昼と夜の気温差が大きいこと、である。²⁰⁾ 稲は寒さに弱く、湿気を好む植物であるため、夏は暑く湿度が高い環境になければならない。また、新潟県は信濃川が流れ、広大な越後平野に恵まれていたことからこの条件にぴったり当てはまり、古くから米作りに適した土地であったのだ。現在は地球温暖化の影響で北海道なども夏が暑くなり、米どころとして台頭してきている。

しかし、1950年代までは新潟県は湿気の多い地域であるため、米菓などの湿気に弱い食品の生産には適さないとされてきた。ただ、1950年代後半から行われた県の食品研究所（現食品研究センター）と新潟県米菓工業協同組合との産学共同研究により製造技術が確立されたことで、新潟県の米菓産業が発達し大量生産を可能とした。²¹⁾ 実際、上記の2019年度米菓メーカー売上高ランキングにて、上位にランクインしている3社は、亀田製菓（設立1950年）、三幸製菓（設立1962年）、岩塚製菓（設立1954年）と同じ時期に体制を確立させている。そんな経緯があり、新潟県では同時期に米菓の生産が盛んになったのである。

また、新潟県の米菓が人気になったのは子供が食べやすいという特徴があったことも大きく関係しているだろう。上記で紹介したように埼玉県の名産である草加せんべいは、硬めであり比較的大人向けのせんべいであるが、新潟の米菓は柔らかく子供にも食べられるとして、全世代に親しまれるものであった。

このように、米菓は地域資源を活用し成功した代表的な事例と言えよう。

2. これまでの活動

2.1 昨年度の活動

今年度の活動はこれまでよりも少なくなってしまったことは否めない。その中には権ゼミナールが引き継いできた大切な活動も含まれるため、報告書に全く書かないというのは避けたい。そのため、今年を行うことができなかったが、一部昨年度行った活動を、昨年度の活動記録として残しておきたい。来年度は何か1つでも復活させることが出来たら嬉しい。

2.1.1 東北中学校訪問授業

昨年の初めごろに東北中学校に訪問し芸術の時間を利用して十分杯を用いた授業を行った。

経緯として、十分杯にはサイフォンの原理という理科の実験としての面白みがあり、十分杯の飾りには様々な種類のものが存在するために芸術としても学ぶことのできるもので

²⁰⁾ 『お米とご飯の基礎知識』 <http://www.okomehp.net/grow/grow007>

²¹⁾ 『新潟県』 <https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/syokuhin/1356914142142.html>

あるからだと考える。

こうした性質を通して中学生から長岡の文化遺産である十分杯を身近なものとして感じてもらいたいという考えの下、東北中学校から依頼があり授業を行うこととなった。

2日間にわたり長岡市立東北中学校の美術の時間をお借りして十分杯の歴史や性質などについての出張授業を行った。ゼミナール生全員が中学校などの学校で授業を行う経験はなく初めてのことであったことや、十分杯の説明を行う相手が20歳以上の飲酒可能な年齢層が多くを占める普段と活動と違うため中学生に対しどのように十分杯の授業をしていくのかといった不安があったため、普段の活動以上に緊張して臨んだ。

実際に授業を行ってみると十分杯の歴史的背景や4つの特徴などを説明する中では、多くの生徒が興味深く話を聞いてくれているように感じた。実際に十分杯に水を注ぎ、流れ落ちる体験をしてもらったところ、すべての生徒が楽しそうに体験している姿を見ることができた。その様子を見ている中で、今までの活動で十分杯のメインターゲットとしてきたお酒を飲める世代よりも若い世代にも十分杯に対し、興味・関心を持ってもらうことができると考えることができた。

長岡市内で十分杯を定着させていくためには、必ずしもお酒が飲める年齢に絞って広報活動を行っていくのではなく訪問授業などを通して若い世代にも情報発信を行う方が良いのではないだろうか考える。理由としては、子供が授業で十分杯を学びそれを家族に話すことによって少しずつだが十分杯が地域へと広がっていくと考えられるからである。それによって十分杯についての理解が幅広い世代へと広がるのではないだろうか。

このような活動を継続して行っていくためにも私たち自ら積極的な広報活動を行っていく重要性を認識することができた。

2.1.2 観光列車越乃 Shu * Kura

観光列車越乃 Shu * Kura において、十分杯で長岡の地酒を楽しんでいただくイベントは昨年度で5年目を迎えている。今年は6年目となる年であり、イベントの体制が大きく変わる予定であった。これまでは、長岡観光コンベンション協会のご担当者様に一緒に乗車していただき、時間管理や連絡などサポートをしていただき、イベントの際は乗客の方々に向けて長岡の日本酒や長岡のイベント情報についてご紹介していただいていた。そして、乗客の方に話しかけ、柔らかい雰囲気を作ってくださっていたのも大きな助けになった。また、ゼミ生の心理的にも、大人の方に一緒に乗っていただくことで気負わずに自由に活動できていた面もある。ただ、今年はゼミ生のみで乗車するという話が進んでいた。

この話は、ゼミ内では不安を感じるものであったが、同時に成長できる機会でもあった。これまでは、様々な面で助けていただいていたが、自立し自分たちで責任を持って取り組むという責任感が生まれていた。また、計画段階でコロナ禍にも突入していたため、イベントそのものにも改変の必要があった。これまでは、イベントスペースにて乗客を集め十分杯の紹介をし、十分杯で日本酒を楽しんでいただいた。しかし、コロナ禍の状況で、大人数を一箇所に集まるよう促すのは不適切ではないかということで、長岡観光コンベンション協会様が新しい方法でのイベントをご提案くださったのである。

その内容は、乗客を一箇所に集めるのではなく、乗車スペースを我々が訪れ、ワゴンに

乗せた十分杯と日本酒を用いて移動しながら十分杯の紹介をしていくというものである。これならば、乗客は席を移動することなく、飲食も自席で行うため、ソーシャルディスタンスが保たれるという見通しであった。ただ、ゼミ生が移動し乗客に話しかけるといいう行為も危険が伴われる。最低限出来る対策として、参加は3人を基本にすると決めていた。1人と2人に分かれ、車両の前からと後ろから同時にイベントを進めていくことで、短い時間でイベントを完了させることが可能になる。新しいやり方に不安を感じながらも、ワゴンの大きさや手配していただく日本酒について確認を取っていたところ、コロナウイルスが全国的に拡大したことで残念ながら乗車計画はなくなってしまった。

現段階で来年度復活するという話は来ていないため、このまま来年度もイベントを行えないのではないかと懸念しているが、先輩方から引き継いだ権ゼミナールにとって最も大切であると言っても過言ではない、思い入れの強いイベントであるため次の世代へつなげていきたいと考えている。ただ、越乃 Shu * Kura だけにこだわらず、今参加できるイベントを大切に、コロナ禍で行ったイベントの経験を活かし、今後も様々な活動を行ってきたい。

<図 22> 観光列車越乃 Shu * Kura 昨年度活動の様子



2.1.3 長岡酒の陣

毎年参加させていただいていた「美味しい酒にアオーレ、越後長岡酒の陣（以下長岡酒の陣とする）」は例年通り参加させていただくことができれば、今年で9回目となる予定だった。大規模なイベントであり、観光客も多く訪れることからゼミ生も気が引き締まるイベントである。また、長岡酒の陣は他のイベントと比べても十分杯の売れ行きが良かった。そのため、知足十分杯（枡）や米百俵十分杯（陶器）の在庫準備に力を入れ、一人でも多くの方に買っていただきたいと、販売に対する意識が強まるイベントであった。

実際に参加して感じたことであるがこのイベントにて、十分杯に興味をもってくださいるのは30代より上の年代が多く、若者よりは年配の方にブースにお越しいただくことが多かった。

「足るを知る」は特に年配の方に響くのだろうか。込められた意味に共感して買ってくださる年配の方が多かったように思う。逆に若い世代は、チラッと見てすぐに通り過ぎてしまう方が多いため、そんな若い方たちにどうPRするかが課題となるイベントである。

ただ、今年の長岡酒の陣は中止になってしまったため、9年目の参加は叶わなかった。しかし、長岡酒の陣も権ゼミナールにとって重要な意味を持つイベントであるため、来年はぜひ復活させてほしいと強く感じている。その際は、下記で述べている十分杯の動画を上手く活用すればもっと多くの方にブースに来ていただけるのではという期待を持っている。

<図 23>長岡酒の陣 昨年度活動の様子



3. 今年度の活動

3.1 HAKKOtrip

HAKKOtrip は長岡市主催のイベントであり、11月21日（土）にアオーレ長岡と撰田屋の町の2会場で行われた。イベントの趣旨としては、全国有数の米どころであり、酒蔵が16歳もあるという酒どころでもある長岡を「醸造・発酵の街」として盛り上げるために行われたものである。酒や味噌、醤油など発酵にまつわる企業が多く出店しており、権ゼミナールもブースを設けさせていただき、日本酒と関連する酒器として長岡の歴史を伝える十分杯の展示と実演を行った。加えて、米百俵十分杯（陶器）の販売も行った。

今年度は越乃 Shu * Kura、長岡酒の陣、長岡大学悠久祭とイベントすべてが中止になってしまったため、この HAKKOtrip が今年度最初で最後のイベントとなった。そのため、開催とともに参加が決まった際は、嬉しくもあったが最後にイベントを行ってから大分時間が空いてしまったため不安もあった。今までの経験も記憶から薄れつつあったため、準備段階でも多少手間取ってしまったが、無事に本番を迎えることができた。反省点としては、以前先輩が作成したイベントに持っていくものを記した、持ち物リストをきちんと引き継がなかったことだ。イベント準備がスムーズに行えるよう新たに作成することを検討したい。

事前準備で具体的に行ったことは、十分杯の荷造り、資料の印刷である。気を付けなければならないのは、ケースに飾られている十分杯を箱にしまう際である。過去に寄贈していただいた価値の高いものであり、先輩方から受け継いだ大切なものである。そのため、

大学の十分杯に触れるときは常に緊張感を持ち、気を使ってきた。そして、資料の印刷は、配布用の A4 サイズと壁に貼る大判の A1 サイズのものと 2 種類用意した。

当日は、コロナウイルス感染症対策のためブースの仕切りとして透明なビニールが張られ、マスク着用徹底、こまめな消毒が義務付けられた。今年が 2 回目のイベントということで、昨年度の 1 回目よりも多くの人々が来場し混雑することも考えられたが、コロナ禍の中、安心してイベントが行えるよう長岡市職員がサポートしてくださったこともあり、来場者は少なくなかったが心配なくイベントを終えることができた。

権ゼミナールのブースに来てくれたお客さんは、年配の方も多かったが、子供連れのお客さんも多かったように思う。4 年生のゼミ生はこれまでのイベントでも小さなお子さんへの説明は経験していたが、子供が十分杯から水が流れる様子を見て、驚き喜んでくれるのは嬉しい。そして、実演を見てもらったのは短い時間ではあるが、大きくなってからもほんの少しでも覚えていてくれたら更に嬉しい。

また、イベント参加が初めてのゼミ生も 2 人参加した。来年度も様々なイベントに参加することと思うが、まったくの未経験ではなく HAKKOtrip に参加した経験を生かすことができる。コロナ禍でのイベントを経験できたという意味でも貴重な経験になったと感じている。

<図 24> 当日準備の様子



<図 25> HAKKOtrip の様子



3.2 十分杯の発音調査

今年度の初めはリモート授業から始まった。次々とイベントが中止になり、活動の制限のある中でできることは何かを話し合った。その際、権先生より、十分杯に対して理解を深めることも重要な活動であるという考えから、発音調査を行ってはどうかというご提案をいただいた。

私たちは、今までの活動でも十分杯を「じゅうぶんはい」と発音していた。また、私たちのみならず、世間一般にも「じゅうぶんはい」という発音で浸透しているように思う。しかし、長岡藩主牧野家現当主、牧野忠昌様は「じゅうぶんばい」と発音しているのだ。十分杯を長岡に広めた牧野家の方が「はい」と発音しているということは、江戸時代に伝わった当時は、「じゅうぶんばい」と呼ばれていたという可能性がある。伝わった当時の発音が判明すれば、イベントなどでお客さんに話す話題にも使えるかもしれない。十分杯の活動をしていくうえで、より深く理解することは決して無駄ではないだろう。

まず、法則性を見出そうとした。言葉の「ん」の後に「は行」がつく場合、半濁音がつくものと清音のものにはどのような違いがあるのか。ゼミ生それぞれ、辞書やインターネットで「ん」の後に「は行」がつく言葉を探した。

<図 26> 「ん」の後に「は行」がつく言葉例

①「ん」の後に清音	②「ん」の後に半濁音
ぎんはくしょく（銀白色）	かんぼう（漢方）
げんふうけい（原風景）	きんぱく（金箔）
しんふぜん（心不全）	さんぱつ（散髪）
ぜんひてい（全否定）	しんぺん（身辺）
ぜんはん（前半）	せんふうき（扇風機）
たんはい（炭肺）	たんぱくしつ（蛋白質）
はんはん（半半）	とんぶく（頓服）
ピン撥ね	ぐんぶく（軍服）
らんはんしゃ（乱反射）	げんびん（現品）
きんほんい（金本位）	にんぷ（妊婦）

上の表は探した言葉の一部である。ゼミ生がそれぞれ探したところ、「ん」の後に清音がつく言葉はとても少ない。国語辞典で調べても半濁音が圧倒的に多く、探すのに苦労したほどである。そして、ゼミ生同士で調べた言葉を持ち寄って考察したところ、「ん」の後に清音がつく言葉は、2つの言葉が組み合わさってできたものではないかという意見が出た。上の表で見ると、右の列が2つに分けると意味を持たない言葉が多いのに対し、左の列は2つに分けても意味を持つ言葉が多い。もちろん、あくまで感じたことであるので確かではない。これによって、右側の言葉は一部を除いて、古くから使われていたのではないかと考察が進んだ。その場合、江戸時代に十分杯が伝わった当時は「じゅうぶんばい」という発音が自然だったという可能性は出てきたと考える。

そして、下記で述べている牧野家史料館へ取材に行った際の、牧野忠昌様へのインタビューで、実際に、なぜ「じゅうぶんばい」と呼んでいるのかと直接伺う機会を設けていただいた。その結果、牧野様が元々のお住まいである京都から長岡においでになった際に、歴史を学び、その際「じゅうぶんばい」と教わったと教えてくださった。このインタビューにより、当時の発音が「じゅうぶんばい」であったという可能性が高まった。しかし、事実は証明されていないため、安易にこの情報を広めるわけにはいかない。そのため、今後も調査をしていく必要がある。

3.3 原理の実験

十分杯のサイフォンの原理のように両端を指で塞ぎ真空状態に限りなく近い状態にしたうえで、片方を高くした逆Uの字になるように持ちその後の変化について調査・考察を行った。ホースの両端が下を向いていても原理の通りに、指を離したとたんに低い方のみから水が流れだしていったため十分杯の中身が流れる状態を再現することができたと感じている。そこからホースの入り口の大きさは同じであることから入り口にかかる力の大きさは同じであると考えた。では何が違うのか、それを今回の実験では確信をもって答えられる答えを見つけることはできなかった。だが、ホースの水が流れでる際に若干ではあるが高い方に水が残っていることが確認できた。これは十分杯から中身が流れ落ちる際に底にわずかに残るものと同じ理由ではないかと考えられる。

例年に引き続き十分杯の原理をゼミ生なりに解釈するために原理の実験を行った。今回行った実験というのは長いホースを利用して十分杯の原理を確かめるというものである。長いホースいっぱいになるように水を入れ、まずはUの字になるようにホースを持ち、中の水が水平になるということを確認した。

来年度以降も実験を続けていき、これらの原因の解明をすることができるようにしたいと考える。

<図 27> ホースを用いた実験を行っている様子



<図 28> ホースを用いた実験を行っている様子



4. 十分杯 P R 動画作成

今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、権ゼミナールの広報活動のメインともいえる観光列車越乃 Shu*Kura などのイベントがほぼすべて中止となったためどのようにして広報活動を行っていくのかについてゼミナール内で議論を重ねた。そんな中で昨年の成果発表会で総合アドバイザーの千葉智様や十分杯の活動アドバイザーの長谷川誠様からアドバイスをいただいた十分杯の紹介動画を作ることで広報活動を行っていくことに至った。

4.1 動画作成の経緯

十分杯の P R 動画を作成するに至った経緯として前述した新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、外へ出る活動がほぼすべて中止となったことが挙げられる。

権ゼミナールが行う外部での広報活動は長岡酒の陣や観光列車越乃 Shu*Kura といった県内だけでなく、県外からもたくさんの方が来られるイベントが大部分を占める。そのため今回のイベントの中止は私たちの活動にとっても大きな影響を与えることとなった。

こうした状況から今年度の活動としてどのようなことができるのかを前期の時間に話し合い、昨年できなかったリーフレットの改訂版を作成する作業を行うかなどの意見もあった中、昨年の成果発表会でアドバイスをいただいた動画作成に踏み切るに至った。

ゼミ生の中で動画を作ったことがある人はいない上に、機材や編集ソフトといった道具の面でもわからないことだらけの中でどのように活動をしていくのかということが第 1 の課題となった。

4.2 学生のみでの動画作成

まずはそれぞれが YouTube で参考にするために動画を探したところ、十分杯のみの紹介動画は何一つとして見つかることはできなかった。参考にするための動画がないのであれば自分たちが最初に動画を作ろうという考えがゼミ内で生まれ、実際に活動を行うこととなった。

ではどのように動画を作っていくのかを考えたところ、YouTube で美術品を紹介する動画を発見した。その動画を参考にして動画を作成していくことが決まった。まずは長岡大学にある食堂前のショーケース内の十分杯をスライドショー式の動画にしていくこととなった。それと並行してどのような編集ソフトを用いて作業を行っていくのかを考え始めた。そして見つけたのが Windows に搭載されているビデオエディターというアプリである。これを使うことで簡単な編集作業を行うことができるようになった。しかし字幕を表示する場所が自由に指定できないことから PowerPoint も使い編集を行っていくこととした。

撮影を始める際にカメラなどをどうするかという話になり、一眼レフのカメラを利用するかとの意見も出たが、カメラを新しく購入する予算がなかったこともあり本格的な道具は使わずにスマートフォンのカメラ機能を利用してスライドショーの素材となる画像を集めることとなった。撮影後に実際に十分杯のスライドショーを作成した。一つ一つの写真の表示時間や写真の切り替わりのアニメーションをどのようにするのかなど、Windows に既存で入っていたソフトでは選択の幅が狭く、非常に苦労した。特に字幕を入れることを

考えた際には、表示される場所や大きさなどがすでに決められておりまた字幕自体も2カ所に同時に表示させることができなかった。そのため PowerPoint にて使う写真の字幕を入れるというように編集を行っていった。知識や経験もない中で話し合いを行いながら、なんとかいくつかの動画を作成することができた。

完成した動画を見ながらどのように手を加えていくか意見を出し合った。意見として出たのは、字幕の文字が小さいため見にくいといったものや、文字のフォントをどのようにするのかといったものが多かった。その中で、このままでは動画作成を行う理由となった「十分杯の認知度を上げる」ことはできないのではないかという意見が出た。理由として YouTube で動画を公開すれば全国のみならず全世界に広く発信できる点で情報発信能力は高いといえるが、無数に存在する動画の中から私たちの動画が再生されるかどうかを考えるとその可能性は非常に低いことが考えられる。YouTube に動画を投稿して十分杯の知名度を上げるためには人の目を引く何かが必要になると考える。ただ淡々と十分杯の画像が流れるだけでは動画を見る人の興味を引くことができないため、十分杯を全く知らない人は見ないのではないかと、十分杯を知っている人しか見ないのではないかと考えた。これらをどのように解決していけばよいのか今のゼミ生だけではどれだけ話し合っても具体的な解決策は出てくることはなかった。人に動画を見てもらうために必要なスキルや知識の壁がとても高いものであると実感した。

<図 29> 学生が作成したスライドショーの動画



4.3 動画制作に協力をしてくださった方々

そのような状況で、動画作成という大きな壁にぶつかっているゼミ生を助けてくださったのが、観光列車越乃 Shu*Kura での活動でお世話になっている長岡観光コンベンション協会の田中様であった。田中様が私たちの動画作成をするに至った経緯や理由に共感していただき、動画作成のスペシャリストであり映像作家兼アートディレクターの高野宙様を私たちの動画作成のアドバイザーとして紹介をしていただいた。高野様より使用する機材の貸し出しや編集ソフトの紹介、作成した動画の修正点などのアドバイスをいただくといった協力の下、本格的に動画作成に動き出すことができた。

この後に記述する活動は観光コンベンション協会の田中様と高野様が協力していただいたことによって実現できたといえるためとても感謝している。その他にも取材に応じてくださった皆様方のお力添えいただいたおかげで今年度の活動ができたことを忘れずに活動が続けていきたいと考える。

<図 30> 観光コンベンション協会の田中様（右）とアートディレクターの高野様（左）



4.4 PR動画作成の打ち合わせ

本格的な動画作成を始めていくにあたり、10月2日に長岡市民センター内の会議室にてどのような動画にするのか、取材先はどうするのかといった話し合いを田中様と高野様とゼミ生で行った。話し合いの中でそれぞれの役割をはっきりさせるところから始まった。これまではきちんとした役割分担ができていなかったため打ち合わせ以前の動画作成準備が不十分であった。

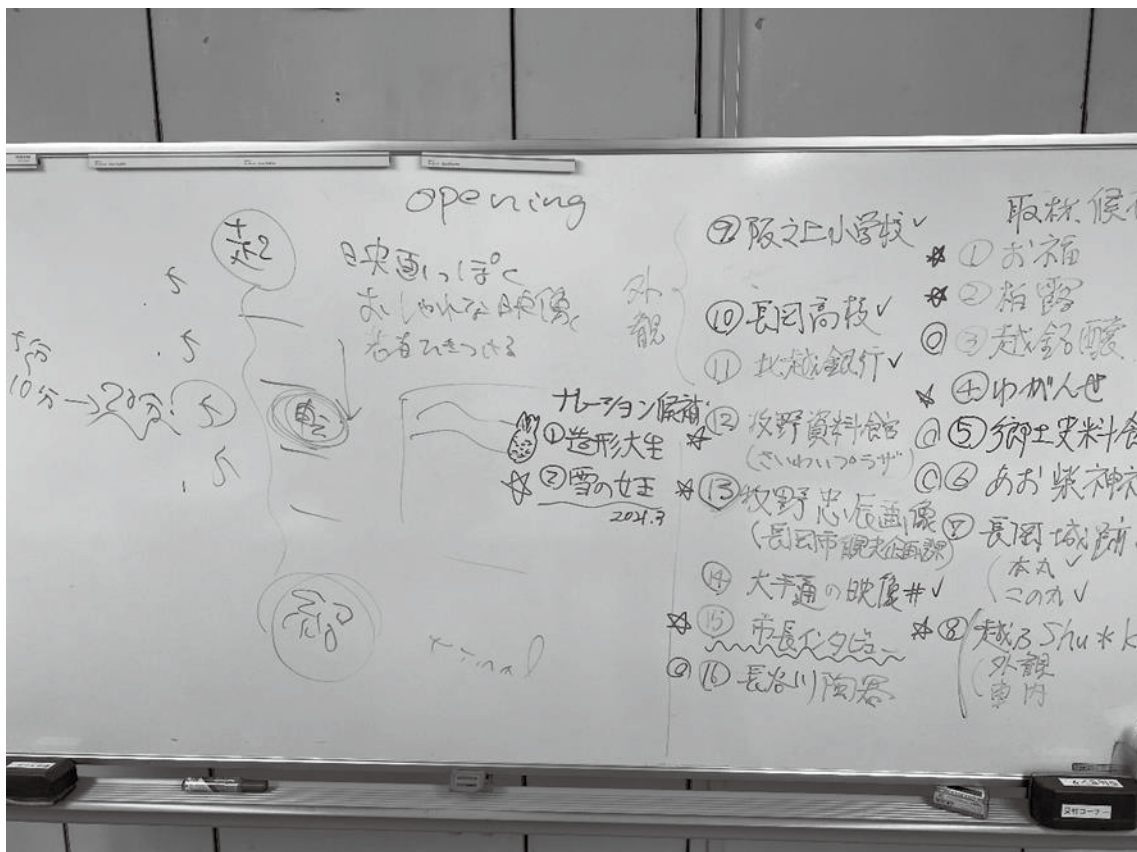
実際にどのような動画を作っていくのかを話し合う際には5W1Hを意識することが重要であると教えていただいた。動画のメインターゲットはどのような年齢層のどのような人なのか、なぜ十分杯の動画を作るのか、またどのような方法で動画を構成するのかといった動画の土台部分となることから、取材する場所は何処にするのか、スケジュールはどうかといったこれからの行動についての細かい部分も打ち合わせを行った。特に動画制作において重要となるのは動画のストーリーをどのように作っていくのかという構成だ

と教わった。動画の構成がしっかりとできていなければ、どのような映像が必要なのか、撮影方法はどのようにするのかといった素材集めに苦労するのはもちろん、全体のバランスが不安定になってしまうということを教えていただいた。

動画の構成については十分杯の歴史や文化や長岡の酒蔵などといった十分杯を取り巻く環境をドキュメンタリー映画のように作成していくこととなった。そのためにも動画を起承転結に分類しそれぞれをどのように作っていくのかを明確にしながら考えていくこととなった。

取材の面では取材候補地と取材予定日を後に控える編集作業の時間を考えたうえで書き出し、メンバーの参加可能状況や取材のアポイントメントは誰が取るのかといった点をしっかりと話し合った。また、各担当について、自分が何をしなければいけないのか、どのように進めていくのかといったことを Slack 上で担当の項目にて明記し、各個人のやるべきことを全体に共有するといったことをまず初めに行うこととなった。こうしてスタートとしては遅くなってしまったが本格的に動画を作成していくこととなった。

<図 31>打ち合わせにて出たアイデア



<図 32> プロの使用する機材の説明を受けている様子



4.5 取材

田中様や高野様との打ち合わせを経て、取材先の候補地を決め電話やメールなどで取材交渉を行った。取材の交渉については、私達がどのように活動しているのか、動画を作る目的などを伝え長岡を盛り上げるために取材させていただきたいと伝え、計6社から取材許可をいただくことができた。我々の急な連絡にも関わらず、快く応じてくださった企業の方々に感謝したい。

取材について、反省すべきこともある。ゼミのメンバーのスケジュール調整ができておらず、誰が参加できるのか、取材の候補日など決めなければならないことが遅れてしまって企業への連絡が遅くなってしまったことだ。また、個人の担当する役割を決めたもののゼミ生同士でコミュニケーションが取れておらず、企業への連絡をいつするのかなどがゼミ生内で共有されていなかった。そのため役割の違う学生が各取材先へ連絡を取り、毎回同じメンバーが取材に参加するといった状況になってしまった。こういった反省点はあったものの、田中様と高野様のお力添えもあり何とか各取材先へ行くことができた。

4.5.1 柏露酒造

柏露酒造は長岡市を代表する酒蔵の一つであり、1751年（宝暦元年）に創業してから長きにわたって長岡の歴史や文化を継承している。1882年（明治15年）には、長岡藩主牧野家の興した酒造業を譲り受け、同家の家紋「三つ柏」を使用した清酒「柏露」を継承²²⁾した。そのような長岡藩との関わりを持つ歴史ある酒蔵に取材に行けたことはとても貴重な経験となった。

取材には10月12日月曜日の13時30分から15時30分までの2時間を予定していたがゼミ生の経験不足もあり、終了予定時間を30分過ぎた16時までとなった。撮

²²⁾ 『新潟長岡の酒造 柏露酒造』 <https://www.hakuroshuzo.co.jp/history.html>

影場所につく前からどのような映像をとるべきかを具体的に考え共有できていなかったことによりスムーズな撮影ができなかったことが時間超過の原因であったと考える。時間超過してしまったが、取材では普段立ち入ることの難しい酵母を育成する場所や実際に発酵を行っているところも見せていただいた。また若い杜氏の方から大杜氏、社長など多くの人にインタビューをすることができ、興味深い内容を聞かせていただくことができた。

若い杜氏の方からは、酒造りに関わることとなったきっかけや自分たちの作るお酒のどのようなところを楽しんでほしいのか、などをお聞きし日本酒が好きだということのほか新潟という日本酒が盛んな地域で自分がその日本酒造りに関わりたいという思いがあるということや日本酒用に栽培されている米本来の味わいを感じることやその日本酒にあった食べ物を見つけるといった個人の楽しみ方を見つけてほしいという声を聴くことができた。杜氏や大杜氏の方からは日本酒の自慢や酒造りにおいて最も重要となる麴について詳しいお話をたくさん聞かせていただくことができた。また、普段であれば立ち入ることができない、日本酒を製造する上で最も重要となる麴を作るところや、日本酒を寝かせるタンクを上からのぞかせてもらうといった大変貴重な経験をさせていただいた。特に寝かせている日本酒を見た時には日本酒の良い香りを感じることができ、寝かせてから期間が短いものの中には気泡がたくさんあり、発酵が進んでいるということを実感でき、発行が進んでいるものほど落ち着いているといった印象を受けた。

その他にも取材で感じたことは社員の方々の様子がまるで家族のような暖かみを感じることができた。酒蔵の印象として親方と弟子の関係からとても厳しく作業場では常に緊張感があるものとイメージしていたが、柏露酒造はそのような雰囲気は感じず、和気あいあいとしてとても楽しそうに仕事をしているように感じられた。

江戸時代より続く長岡の誇る歴史を酒造りという形で継承しているというところをたくさん見せていただくことができた。

4.5.2 お福酒造

お福酒造株式会社は1897年創業、今年で創業124年の歴史のある酒蔵である。創業者の岸五郎が生み出した「速醸酛」という画期的な醸造法は、現在醸造界で広く使用されている。代表的な銘柄「お福正宗」は飲むたびに幸福を感じるようにと名付けられたという。私たちは10月13日（火）15:00から訪問し、取材をさせていただいた。

取材の内容は上記で述べている柏露酒造を取材させていただいた際と同じく、杜氏の方のインタビュー、商品と周辺風景の撮影、作業場の撮影をさせていただいた。撮影の全体を通して印象的であったのは、茅葺屋根の社長ご家族のお住まいである。中に案内していただき、素敵なお庭を背景にインタビューをさせていただいた。

インタビューを受けていただいたのは、新潟の名工に選ばれた中野杜氏である。新潟の名工とは、「卓越した技能者（現代の名工）」のことを指し、卓越した技能を持ち、その道で第一人者である技能者を厚生労働大臣が表彰するものである。中野杜氏は令和元年度に選出された、新潟でも素晴らしい人材なのである。そんな方にインタビューを受けていただき、とても嬉しく思う。インタビューの内容はぜひ完成した動画を見ていただきたい。

商品、周辺風景の撮影は経験が浅いこともあるが、スムーズにはいかなかった。上記で

述べていることでもあるが、何を撮影するかを十分に共有できていなかったことが原因である。また、具体的に何を撮影するかが決まっていなかったという問題もある。そのため、手当たり次第、風景や商品を撮影しているうちに取材予定時間の2時間を大幅にオーバーしてしまった。それによって、取材先にご迷惑をおかけすることになってしまった。取材先の次の予定など考慮せず、自分たち本位で取材を進めてしまったことの結果であるとして、深く反省している。

しかし、この取材を通して感じたことは苦い思いだけではない。作業場を見せていただき、貴重なお話を聞き、温かい対応をしていただいたことは、良い動画にしようというモチベーションアップにつながった。

<図 33>取材の様子



<図 34>柏露酒造の社長や大杜氏へのインタビューをする準備の様子



4.5.3 株式会社長谷川陶器

私達のゼミナールが十分杯の活動当初からお世話になっている株式会社長谷川陶器に取材をさせていただきました。米百俵十分杯の作成についての苦労話や私たちの活動に協力して下さる理由などをたくさんのお話を教えていただいた。

十分杯の制作過程についてはそもそもなぜ長谷川陶器様に十分杯の作成を依頼したのかといった質問では長谷川陶器の社長夫人が権先生の韓国語の授業を受けていたことから始まっていることをお聞きしました。そのほかに米百俵十分杯の制作過程については、大学に飾ってある十分杯のほとんどは中の管から水が流れ落ちる際にスムーズになっていないことがあり、スムーズにするために改良に改良を重ね、何度も窯元との話し合いを行ったことを聞き自分たちの想像以上の苦労があったということを感じた。

長谷川陶器との関わりがあったからこそ今の私たちの活動があるということを忘れずにこれからも共に活動をしていきたい。

<図 35>株式会社長谷川陶器社長 長谷川誠様



4.5.4 わがんせ

十分杯を販売している店舗として駅ビル長岡C o C o L o長岡1階にある株式会社よしやの店舗であるわがんせに取材を行った。取り扱っている十分杯の紹介や十分杯を購入される客層といったことから、十分杯を取り扱うことに至った経緯やわがんせという店名の由来などを聞かせていただいた。中でも十分杯の紹介をしていただいている中で一見するとコーヒーなどを飲むために使うようなコップで十分杯の機能を備えているものがあり、現代風に十分杯も種類が豊富になってきていることを強く実感することができた。

また、「わがんせ」という店名が仏教用語で「和顔施」と書き、和顔とは笑顔。施=ほどこす。つまり”笑顔をサービスする。”という意味²³⁾と知り、長岡の文化遺産を通して長岡を訪れる人を笑顔にしていることを感じ取ることができた。私たちの動画が完成したら店内で流してくれるとのことなので私たちも笑顔をサービスする一助になりたいと考える。

23) 『和雑貨の店 わがんせ』<http://n-waganse.com/what/>

<図 36> コーヒーカップのような十分杯



4.5.5 長岡藩主牧野家史料館

十分杯の歴史を語るうえで牧野家なしに語ることはできない。観光コンベンション協会の田中様からの提案があり、牧野家史料館の館長であり第 17 代牧野家当主である牧野忠昌様に取材を行うことができた。私たちのゼミ活動に対して感じていることや牧野様が十分杯と出会ったきっかけ、新潟に来る前は京都にいたことから新潟と京都の日本酒の違いや新潟に来て驚いたことなど牧野家の歴史に関わることから牧野様本人に関係することまでたくさんのお話を聞かせていただいた。そのほかにも牧野様が「じゅうぶんぱい」と発音されることについても質問をさせていただいた。牧野様が十分杯について学んだのは幼少期からではなく、お酒が飲める年齢へと近づいてきたときからだと教えていただいた。牧野様としては、「じゅうぶんはい」も「じゅうぶんぱい」のどちらかが正しいということではないということを教えていただいた。

十分杯を広める私たちの活動についても認知していただいております、ショーケースの十分杯コレクションや米百俵十分杯について長岡らしい十分杯だとおっしゃっていた。また、新潟県の日本酒についても端麗辛口の味わいに牧野様だけでなく奥様も気に入っているとのことだ。

お忙しい中、こちらの急な取材連絡であったにも関わらず応じてくださったことに感謝したい。

<図 37> 第 17 代牧野家当主 牧野忠昌様



4.5.6 長岡市郷土資料館

長岡大学裏にある長岡市郷土資料館に日本最古の十分杯、十分杯銘並序の撮影を行うために取材を行った。そのほかにも展望台から長岡の街並みを一望する風景の撮影を行ったりと、長岡の街並みを写すために高野様のアドバイスの下、ドキュメンタリー映像のようにいくつかのカットを用意し、編集の段階で上手くつなげていくといったやり方で編集を行っていくということとなった。

4.5.7 ぽんしゅ館

C o C o L o 長岡 2 階にて、新潟県内の地酒を中心に「食をもっと美味しく、お酒をもっと美味しく」 お酒を使用した甘いお菓子や米菓、日本海産の食材から南魚沼産のコシヒカリといった新潟県を代表する数々のお土産品を取り扱い、その中で長岡の文化遺産である十分杯の販売も行っている「長岡銘品の館 ぽんしゅ館」の取材を行った。

今回の取材では 4 年生 1 名が先方との連絡役を行いながら、これまで取材活動に関わることの少なかった 2・3 年生に経験を積ませるためにインタビュアーなどの店舗の方と話を行う担当を任せるといった形式での取材であった。実際の取材活動を行うにあたり企業の方とお話をする機会が少なかったため、先方に対し失礼のないように事前にインタビューを行う際に注意することや話し方といった練習を 4 年生と行った。また、今回の取材では 2 名のモデルの方に協力を依頼し撮影を行ったためこれまで以上に入念な準備が必要となった。

当日はぽんしゅ館の店内の様子についての撮影を行ったほか、県内全ての酒蔵が製造する日本酒の試飲を行うことのできる利き酒コーナーの撮影を行った。利き酒コーナーにおける撮影では、モデルの方に試飲をするために必要となるお猪口と 5 枚のメダルを受け取ってもらい、実際に利き酒コーナーを利用してお酒を楽しんでいる様子をドキュメンタリ

ーのようなイメージをコンセプトとして撮影をすることとなった。数多くある日本酒の中から1つのお酒を決めるといったシーンやお酒を飲みながら楽しんでいただいているシーンなどの撮影を行った。モデルの方に協力していただいた部分の撮影が終わった後に店長へインタビューを行った。主な質問内容としては、十分杯に対するお客様の反応や、大学が所有する十分杯の雰囲気合ったお酒についてなどである。

取材を通しての反省点は、利き酒コーナーの撮影に予想以上の時間がかかったことにより取材全体の予定に遅れが生じてしまったことである。遅い時間帯からの撮影協力であったにも関わらず遅延が発生してしまったのは、取材における事前準備の段階で撮影についての時間配分における見通しが甘かったことが原因であると考えている。

<図 38> お酒を楽しむモデルの方の様子



4.6 最初の躓き

動画作成について、私達は何度も失敗をしてきた。特に大きな失敗といえるのが取材などに関してコミュニケーションが取れていなかったことから個人の役割がはっきりとしていなかったことである。これによって本来取材の連絡や日程調整を行っていたのが取材担当ではなく、動画の構成を考える担当であったことや取材に行くにも毎回参加している人物が同じであるなどの問題が多々発生した。この問題が発生した原因として、各自の授業時間などの確認が大雑把であったために基本的に授業がなく時間に余裕のある4年生が取材を行うことが多かったということが考えられる。そのほかにも取材の連絡が遅くなってしまったことだ。対策としてまず、事前の打ち合わせを綿密に行うことが挙げられる。取材に行くことと決まった時点で各個人の予定を全員がきちんと把握し、そのうえで先方との連絡はもちろん取材の手助けを行ってくださる高野様の都合を早めに聞くといったことを徹底することによってこれらの問題は対処可能であると考えられる。これらの問題が頻発したことにより、動画の構成がまとまっていなまま取材を行うこととなってしまった。構成が

まとまっていなかったために、取材先でどのような映像が欲しいか、撮影した映像をどのように編集するかなどの次につながる部分が全くできていなかったため、この後の編集作業で困難を極める原因となった。

その他にも、取材等を4年生がメインで行っていたことから3年生に経験を積ませることができていなかったことも問題点として挙げられる。これら大きな問題の原因となったのは間違いなくゼミ生同士コミュニケーション不足だといえる。特に4年生と3年生や2年生といった学年が離れている場合はその傾向が強かったといえる。これは前期の活動がオンライン授業であったことから直接顔を合わせる機会が遅くなってしまったことによる影響が大きいと考えられる。実際に顔を合わせて活動を行ったのが前期最後の授業であったことから声を掛け合って活動する機会が少なく、また今年度のイベントもほぼすべて中止となってしまったことから事前準備等の裏方作業がなく会話が少なかった。対策としてはなによりもコミュニケーションをとることだ。地域活性化の活動はコミュニケーションなしでは成り立たない。日々の挨拶を行うことからコミュニケーションをとるように意識して活動を行っていかなければならないと強く実感した。

活動を通して4年生のリーダーとしての経験不足が後輩への指示だしといった点で多く見られた。後輩に対して強く指示ができていなかったため、何をいつまでにやるのかを明確にできていなかったことや、後輩の行動が遅れていた場合に本来担当することでないことまで4年生の一部が代わりに行うといったことがこれまでに多くあったことも問題だろう。3・2年生については初めてのゼミ活動であったこともあるが、4年生の指示待ちとなってしまったことが問題であると考えられる。そのほかにも自分たちで考え行動するといった様子が見受けられなかったことも大きな問題である。自分たちが行うべき作業についてわからないところや次にやるべきことがわからないということがあっても、ゼミの時間以外で4年生に聞くといった行動が見られなかった。結果として一部の生徒にのみ負担が掛かるといったことになってしまった。先輩は後輩と、後輩は先輩とコミュニケーションが取れていないことから信頼関係が薄かったのではないかと反省している。

4.7 取材を終えて

各取材先への取材活動が終わり、本格的に編集作業に入っていくこととなったが、ここまでに大きな問題が残っている。それは動画の構成ができていないということである。構成ができていないということは、どのように編集を行っていくのかがはっきりしていないということであり、動画自体があやふやなものとなっていることである。

これを解決するためにも、改めてゼミ内で話し合う必要ができた。しかし、実際に構成に関わったのは4年生のみであった。ここでも先輩後輩間のコミュニケーション不足が出てきてしまったと感じている。

4年生の卒業が近づいている現状でこのままでは来年度の活動にも大きな影響を与えることが考えられるため、来年度も活動ができるように足場はしっかりと固めておきたい。

そのためにもゼミ生が一致団結する必要があることを強く認識することができ、本格的な編集に入る際にはコミュニケーションをしっかりととっていかなければ動画がまとまらなくなるため積極的にコミュニケーションをとるようにしていくことを心掛けた。

4.8 編集作業

いよいよ動画作成の肝となる編集作業に入った。動画制作のアドバイザーである高野様から紹介していただいた「DaVinci_Resolve」というソフトを使い編集作業を行っていった。ここで一番大変であったことはソフトの使い方はもちろん、専門用語の意味を理解できていなかったことである。編集作業前最後の撮影を大学で行った際、高野様から簡単な編集方法を教えてもらってはいたが、それ以上にわからないことだらけであった。特に撮影した動画の音声について使いたいデータのみを残しそれ以外をカットする方法であったり、音声自体の大きさを調節する方法などについて自分で調べたり、動画の細かな時間配分をどのようにしたら良いのか、視聴者に一番見せたいところを伝えるためにはどのようにしたら良いのかといったことを高野様に聞いたりと悪戦苦闘しながらなんとか編集作業のスタートラインに立つことができたと感じている。

そして、構成ができていない部分からすぐに作り始めることとなった。簡単な作業であっても苦勞するところはとても多かった。まず、動画の繋ぎ方だ。インタビュー映像を流している中でその中で別の映像を挟むようにすることや、インタビューとインタビューの間の間を作ることが特に難しかったといえる。次に撮影した映像一つ一つの尺をどうするかという点である。見せたいところすべてを見せるようにしてしまうと動画の時間が膨大なものとなってしまい、ただの取材風景を流しているだけというようになってしまう。そうならないためにも撮影した映像一つ一つのどこが一番見てほしいのかを考え、使う素材の厳選を行っていった。最後に映像と音声を合わせることだ。映像と音声はそれぞれ別の機械を使っていたため、使いたい部分の映像と音声を合わせる必要があった。それはゼロコマ単位の調整が必要であったためとても苦勞した。

これらの苦勞を乗り越えて形になったものを作ることができたが、高野様に確認してもらったところ完成したものには多くの課題が残っているということを教えていただいた。ただ、数多くの苦勞を乗り越えて1つの動画を作ることができたのは大きな自信となった。一つ一つの課題を解決しながら完成に近づけていきたい。

<図 39> 動画の作成について話し合いながら編集を行っている様子



4.8.1 動画の目的

遅くなったが、この動画の目的とは、十分杯を知らない人が十分杯を取り巻く歴史・文化・思想を酒蔵や観光スポットなど長岡をPRする動画を見ることによって興味を持ってもらうことである。初めに作っていた十分杯を一つ一つ紹介するといった動画では、十分杯を何も知らないという新規の参入者は非常に少ないと考えられる。そこで目を付けたのが長岡の観光資源を含めてその中で十分杯を紹介することで様々な角度から十分杯に興味を持ってもらおうということである。

例えば、歴史的な面から十分杯を見れば越後長岡藩の財政政策についてや、高田藩のお家騒動などの歴史背景を見ることができると考える。文化の面から見れば、日本酒の種類が豊富である新潟県において、お酒を飲むための変わった杯として楽しむことができると考えられる。思想の面からみれば、なぜ、酒蔵の多い長岡でたくさんのお酒を注ぐとすべてこぼれてしまうという杯が広まったのかを考えることができると考える。

これらのことを長岡のPR動画を通して見ていただくことで長岡の観光面の発展の手助けができれば関連して十分杯の認知度も向上させることができるのではないだろうかと考えた。

4.8.2 編集での反省

編集での反省点は、メインの動画編集をしているのが一人だけであったこと、動画の構成について全員がきちんとどのように進めていくのかを共有できていなかったことだ。ほかのメンバーが何もしていなかったという訳ではなく、本格的な動画編集の練習としてスライドショーの作成を行っていたり、構成の細部を詰めたりしていた。

ソフトをある程度使いこなせていないと、動画を編集するといったことが難しいのではないかという考えから、2・3年生はスライドショーの作成から始まった。こと前に撮影した十分杯一つ一つの画像をカットのやり方として、表示時間の調節、切り替わりの方法等を使い分けながら行っていった。

動画の構成について、大枠は完成していたが内部の細かな内容があいまいになっている点が多く見られた。そのため編集を行う者が細かな部分の調整や内容を考えることになってしまっていたことも問題であったと考える。

大枠だけ決まっており、細かな肉付けが編集担当によって変わることが想定されていたため、分担作業を行うことが難しかった。そのためゼミ生同士の密接なコミュニケーションが重要となる。編集作業に入るにあたり、ソフトの使い方等で先輩後輩間のコミュニケーションが活発になってきてはいたが、それでもメインの動画編集については活かすことができなかった。

動画の構成について、全員で共有できていなかったのはゼミ生の中で自分の担当ではないからやらなくてもいいのではないかという甘い考えがあったのではないかと考えている。特に後輩から動画の構成に対しての意見が全くと言っていいほど出てくることはなかった。初めてのことでわからないことや遠慮をしてしまうところもあったと思うが、それでも自分たちが行っていく活動だという強い気持ちを持って活動を行ってほしいと考える。

4.8.3 成果発表会へ向けて

初めはPR動画をそのまま流すことを考えていたが、13分という時間に収まる可能性が非常に低かったこともあり、動画のダイジェスト版を作ってはどうかと高野様からアドバイスをいただき作り始めることとなった。それぞれの取材先をまとめて一本の動画にすることができたが、その時間は約10分でありこのままでは学生の発表としては不適切ではないかと十分杯の活動アドバイザーである中澤様からの意見があった。その意見を受けてどのように成果発表会で動画を使うかを考えたが、学生だけでは意見をまとめることができなかつた。そのため、もう一度高野様と話し合う機会を設けて相談をした。そこでいただいたのが1分から2分の映画の予告編のような動画を作ってはどうかというものであった。その意見を受けて動画の予告編をイメージした動画を作成することとなった。

動画を作ることになったものの、一番大きな壁はどのように動画を作っていくのかということであった。予告編の動画の見せ方はもちろん、動画の構成自体がまっさらなものから始まったため1つの動画を作り上げるのは容易なことではなかつた。そんな中、試作品を上げながら何度も話し合い、作り上げることができた。

成果発表会本番では、発表の時間がオーバーしてしまつたが、それでも大きな手ごたえを得ることができた。

5. 今後の活動

今後の活動内容としては、まず現在進行形で作成を行っているPR動画の完成である。これまでの試作品を基にしてゼミ生全員が納得できるようなものを作り上げることができるようになりたいと考える。そのためにも残り少ないゼミ活動の時間を大切にしていきたい。まずやることとして構成の細部を全員がきちんと理解したうえでの共有を行うことだ。この場面ではこのように進行するように編集を行うということや、このように進行していきたいからこの部分で使える時間はこのくらいなどの動画編集を行っていく上で必要となっていくコミュニケーションはもちろんそれ以外にも積極的なコミュニケーションが重要となっていくことが考えられる。

ゼミ生の人数が他のゼミナールと比べ少ないゼミナールではあるが挑戦していることはとても大きなもので、達成するためには困難を極める。しかし、その大きな壁を乗り越えた先には技術的・精神的に大きく成長することができたと胸を張って言えるようになる。今年度の私たち4年生はあまり後輩たちのお手本となることができなかつたように感じている。そんな私たちを見てきた後輩たちには私たちのような失敗はして欲しくは無い。人数が少ないゼミナールだからこそ内部でのコミュニケーションを積極的にとっていかなければ満足に活動を行っていくことは難しい。そのため、新しく権ゼミナールの一員となる3年生とも積極的にコミュニケーションをとりながら活動を行うことを意識しながら唯一の4年生となる阿部君を支えながら一丸となって活動に取り組んでほしいと考える。

6. 今年度の活動を振り返って

今年度の活動を振り返って、十分杯の発音調査を行うことや十分杯のPR動画を作成するといった他のゼミでは経験することのできない貴重な活動を行うことができたのはゼミ生にとって非常に良い経験となったと感じている。特に動画作成においては取材先への連絡を行うにあたってこと前に行うべき作業がどのようなものなのかを知ることができたことや取材先に送る企画書の作成方法などの相手方に確認をとる際に必要なことを学ぶことができた。また、動画の撮影や編集については実際にプロの方が使う機材を使用させてもらい撮影を行ったことや、動画の編集という学生時代に自発的に行う機会の少ない経験をさせていただいたことなど、とても多くのことが経験することができた。

しかし、反省すべき点もある。それは権ゼミナールの弱点と呼べる部分が大きく出てしまったことだ。人数が少ないからこそ一人一人が意識して活動を行っていかなければ、私達の活動は困難を極めると考えている。しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、前半のゼミナールがZoomを利用したオンライン授業となった。これによって実際に顔を合わせて活動するのが遅くなり、コミュニケーションが取りづらくなってしまったのではないかと考えている。

こういったこともあったが、HAKKO tripといったイベントが無事開催することができたのはゼミ生にとって非常にうれしいことであった。3年生の阿部君がイベントに1度も参加しないまま4年生に上がることを避けることができ、私達権ゼミナールがイベントの際にどのようなことを行っているのかなど実際に体験することができたため来年度の不安も少しは軽減させることができたのではないかと感じている。

7. 結びに変えて

今年度の活動をもって十分杯の地域活性化活動の取り組みは10年という節目の年を迎えることができた。こうして10年という長い年月の間、研究を続けてくることができたのはこれまでの先輩方の功績があったからであろう。先輩方の活動もあり、イベント等で十分杯を知っていると答えてくださる方が年々増加しているように感じている。これは非常にありがたいことである。私たちが続けてきた活動が長岡の方々に認知していただけているということの証拠であり、なによりもこれからもこの活動を続けていく上で責任と誇りを持つことができると考えている。

ただ、人数不足という大きな壁が障害となってしまったことも確かだ。権ゼミナールは他のゼミナールと比べても人数が少ないゼミである。昨年のゼミ生の人数は4年生が4名、3年生が4名の計8名であったが、今年はそれを下回る6名での活動となった。そのため先輩方には非常に申し訳ないことになってしまったが酒粕の活動を断念せざるを得なくなってしまった。やはり権ゼミナールにとってゼミ生の確保は大きな課題となってしまっている。より多くの2年生に権ゼミナールの地域活性化活動に魅力を感じてもらいゼミ生となってもらうためにはどのようにしたら良いのか、外だけではなく学生に向けての活動アピールを行ったほうが良いのかなど考えられることは多い。

また、今年度は新型コロナウイルスの影響が大きく出てしまい、今まで参加させていただいた長岡酒の陣や観光列車越乃 Shu*Kura といった大きなイベントが軒並み中止とな

ってしまったため外での活動が極端に少なくなってしまった。このような大きなアクシデントが今後また起きる可能性があるかもしれない。その時には今年度の私たちの活動内容を振り返って早め早めの準備や計画を行ってほしいと考えている。

権ゼミナールでの活動は外からはただただ大変な活動であるというように見られることが多いと考えているが、地域活性化という大きな取り組みを行っているため大変な活動であることは当然ともいえる。重要なのはその活動を通してどのように成長していくのかだと考えている。ただ言われたことをやるのはだれにでもできることであるが、その中で自分自身がなぜ行うのか、どのようにして進めていくのかを考えながら行うだけでもその後の成長度合いは大きく変わっていく。十分杯の地域活性化活動を通して人間的に大きく成長していくことで、頻繁に変化していく今の社会にも対応できる人材になることができるゼミナールであると本学の学生にもアピールしていきたい。

補論.十分杯とは

本項では、「十分杯」を見たことがない人向けに、十分杯の原理や歴史をご紹介したいと思う。十分杯を知っていただくことで、長岡への関心が高まってくれることを期待したい。また、十分杯の楽しみ方などの豆知識をご紹介している。十分杯を知っている方も読んで頂ければと思う。

補.1.1 4つの特徴

十分杯には大きく分けて4つの共通する特徴がある。十分杯には、①<補・図1>のように底に穴があいている、②<補・図2>の写真のように真ん中に「飾り」と呼ばれる突起が立っている、③その飾りの中を管が通り、底の穴に繋がっている、④一定の量（8分目程度）を超えて注ぐと、中に入っていたすべてのお酒が3から漏れてしまうため杯の中が空っぽになる、の4点が挙げられる。十分杯はお酒を飲む際は中央にある飾りが鼻についてしまい、非常に飲みにくいいため実用性はあまりない。後述するが、十分杯は教訓と戒めの杯として知られていることから、お酒を飲むための杯というよりは見て楽しむ・戒めるといった側面が強い杯である。

<補・図1> 十分杯の底面の穴



<補・図2>長岡市 初代市長が配った「梅十分杯」



この十分杯の仕組みにはサイフォンの原理というものが使われている。サイフォンの原理とは、サイフォン（ギリシャ語で、チューブ・管という意味）を使って、高いところの水を低いところへ移すしくみのことである。水槽を掃除する際に”サイフォン”式オーバーフローという名前がついた器械を使用することがある。水槽で魚を泳がしたままゴミ掃除が出来るものである。サイフォンの原理は他にも、灯油のポンプやトイレの配管工などの、日常でよく目にするとところに使われている。

補.1.2 十分杯が長岡に残る理由

十分杯が江戸時代から現代まで長岡に語り継がれたのには、次のような理由がある。江戸時代において、長岡藩の石高は7万石とされているが、穀倉地帯新潟平野を開墾し、実質の石高は約2倍の14万石程度とされている。14万石は、当時の諸藩の中でも豊かな藩であり財政的にも余裕があった。しかし、牧野家第3代藩主牧野忠辰公の治世に、高田城の二の丸請収、幕府の委託事務、度重なる水害などが財政を圧迫し、財政的に厳しい状況になってしまった。そんな中でも、長岡の藩士たちは贅沢な暮らしを辞めなかったという。

長岡藩の藩風は”質実剛健”として知られている。しかしこの頃の長岡藩士全員がその精神を得ていたかは疑問である。長岡藩藩士の多くが戦国の殺伐とした雰囲気、気質から抜け出せないでいたと考える。長岡藩牧野家の歴史等を記した“牧野家譜”には、戦国以来の家臣達が藩に全く従わず、城中で刀を抜き柱を傷つけたり、酒を飲んで暴れたりと粗暴な行いばかりをしていたと書いてある。その為、長岡藩牧野家初代当主牧野光成は、寛永14年（1624年）に心労のため亡くなっている。その後50年後、牧野忠辰公の藩主の時代に十分杯は長岡に伝わったとされている。十分杯は領民が持参したとされ、その十分杯に感銘を受けた牧野忠辰は、『十分盃銘』を詠んだという。

忠辰公はこのような激しい気性の藩士たちをまとめ上げ長岡藩の全盛を招来し、長岡藩を越後の譜代大名の雄藩へ発展させることに成功したのである。十分杯は長岡藩の発展になくてはならないものだったのかもしれない。

<補・図3> 忠辰公が実際に見たとされる竹十分杯



補.1.3 十分杯の教訓

十分杯には「足るを知る」という教訓がある。現状を満ち足りたものと理解し、不満を持たない、程々で満足するという意味である。しかし、十分杯の教訓として一般的に知られている「足るを知る」という言葉は、十分杯を長岡に広めたといわれる長岡藩3代藩主の牧野忠辰が詠んだ『十分盃銘（補・図3）』という詩の中には出てこない。

十分杯には「満つれば欠く」という教訓がある。“満つれば欠く”とは、あまり欲張りすぎるとかえって失ってしまうので欲張るなという意味である。これと似た言葉で、“足るを知る”という言葉がある。現状を満ち足りたものと理解し、不満を持たない、程々で満足するという意味である

参考文献

加藤義一 (1991)『自然の中の人間シリーズ 土と人間編⑨ 人間を助けた動物』社団法人農山漁村文化協会

宮田律 (2002)『物語 イランの歴史』中央公論新社

Erich Isaac (1970). 『GEOGRAPHY OF DOMESTICATION』. Prentice-Hall,Inc. (E・アイザック. 山本正三・田林明・桜井明久 (訳) (1985). 『栽培植物と家畜の起源』大明堂)

参考ウェブサイト

12-13 2 Discoveries and Inventions 「Water-Powered Inventions」

<https://sites.google.com/site/12132discoveriesandinventions/water-powered-inventions>
(2021年1月12日閲覧)

DAKS JAPAN (2015年11月16日)「～”イングリッシュ・ジェントルマン”：英国スーツに込められた意味～」 <https://daks-japan.com/englishinfo/495/> (2021年1月12日閲覧)

VOKKA (2018年6月17日)「イギリススーツブランドおすすめ 15選」
<https://vokka.jp/13066> (2021年1月12日閲覧)

中国駐大阪観光代表左処「蘭州 - 黄河羊皮袋の筏」 <http://www.cnta-osaka.jp/spot/culture/lanzhou-the-raft-of-the-yellow-river-sheepskin-bag?attraction=250>
(2021年1月12日閲覧)

人民中国「黄河を下る羊皮いかだ」

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/wenhua/tradition/200201.htm> (2021年1月12日閲覧)

人民中国「羊皮いかだ」 http://www.peoplechina.com.cn/guangguang/2013-11/13/content_577950.htm (2021年1月12日閲覧)

テニスの学校 (2017年12月20日)「ナチュラルガットの特徴って？ (長所と短所)」
<https://tennis-gakko.info/gear/g010> (2021年1月12日閲覧)

Rue89Lyon 「Tsonga en demi-finale de Roland-Garros, avec deux boyaux de vaches」
<https://www.rue89lyon.fr/2015/06/05/tsonga-roland-garros-cordage-boyaux-vache/>
(2021年1月12日閲覧)

私家版 楽器事典 / 楽器図鑑「世界のバグパイプ」 https://saisaibatake.amezaiiku.com/musical/instruments_bagpipe_world.html (2021年1月12日閲覧)

カーペット百科事典 ～ CarpetVista カーペットの全て～「カシュガイ」
<https://www.carpetencyclopedia.jp/sutairutokigen/perusyajyutan/kasyugai> (2021年1月12日閲覧)

GLOBAL NOTE (2021年1月7日)「世界のヒッジ飼育数 国別ランキング・推移」
<https://www.globalnote.jp/post-15233.html> (2021年1月12日閲覧)

全国米菓工業組合「あられ おせんべい」<http://www.arare-osenbei.jp/type.html> (2021年1月12日閲覧)

お米とご飯の基礎知識「お米づくり」<http://www.okomehp.net/grow/grow007> (2021年1月12日閲覧)

農林水産部食品・流通課販売戦略班(食品産業担当)(2019年12月26日)「新潟県の食品産業のすがた」新潟県 <https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/syokuhin/1356914142142.html>
(2021年1月12日閲覧)

岩塚製菓株式会社(2020年5月26日)「2019年度 決算資料説明書」
<https://www.iwatsukaseika.co.jp/pdf/ir/explanation20200526.pdf>(2021年1月17日閲覧)

池尻弦楽器工房(2020年7月25日)「バイオリン弦の歴史」
<https://rearpond.mystrikingly.com/blog/9ea417fb084> (2021年1月12日閲覧)

ヤマハ株式会社「バイオリンのマメ知識スチール弦か、ガット弦か、それが問題だ」
https://www.yamaha.com/ja/musical_instrument_guide/violin/trivia/trivia004.html (2021年1月12日閲覧)

柏露酒造株式会社「酒蔵の歴史」新潟長岡の酒造 柏露酒造
<https://www.hakuroshuzo.co.jp/history.html> (2021年1月18日閲覧)

和雑貨の店 わがんせ「わがんせとは」<http://n-waganse.com/what/> (2021年1月18日閲覧)

株式会社日本政策投資銀行新潟支店(2016年12月)「新潟における“食”関連産業の発展可能性 - 「米等加工品」産業を成長エンジンとする地域経済構造の強化 -」
https://www.dbj.jp/pdf/investigate/area/niigata/pdf_all/niigata1612_01.pdf (2021年1月17日閲覧)

中国検索サイト baidu で「羊皮筏子的制作过程，用嘴吹气，太厉害了」というキーワードで検索して表示されたサイト。
https://m.baidu.com/sf?pd=video_page&nid=5498348056480103576&sign=12689806496652915920&word=行者：羊皮筏子制作过程，用嘴吹气，太厉害了！&oword=羊皮筏子制作&title=整只羊做羊皮筏子，制作过程就是直接整个剥&atn=index&alr=1&openapi=1&resource_id=5052&frsrcid=5373&cambrion_id=&baijiahao_id=1626416710338311&sp=1&ext=%7B%22src%22%3A%22https%3A%5C%2F%5C%2Fvd3.bdstatic.com%5C%2Fmda-ke8s8ug6iu3bnh12%5C%2Fmda-ke8s8ug6iu3bnh12.mp4%3Fplaylist%3D%255B%2522hd%2522%252C%2522sc%2522%255D%26pd%3D20%22%2C%22loc%22%3A%22http%3A%5C%2F%5C%2Fhaokan.baidu.com%5C%2Fv%3Fpd%3Dwisenatural%26vid%3D5498348056480103576%22%2C%22log_loc%22%3A%22https%3A%5C%2F%5C%2Fbaijiahao.baidu.com%5C%2Fs%3Fid%3D1666199889988941259%26wfr%3Dcontent%22%2C%22duration%22%3A435%2C%22poster%22%3A%22http%253A%252F%252Fvdposter.bdstatic.com%252F9f7f9f660c6f9be3e2eedbe6cdeddcd.jpeg%253Fbpoh%253D720%2526bpow%253D1280%22%2C%22source%22%3A%22%5Cu597d%5Cu770b%5Cu89c6%5Cu9891%22%2C%22s%22%3A%22bffb477c1406152e04290490c6f78cfd%22%2C%22isHttps%22%3A1%2C%22isCompilation%22%3Anull%2C%22jsy%22%3A1%7D&top=%7B%22sfhs%22%3A1%2C%22_hold%22%3A2%7D&videoapp=1&lid=10761672711922861372&_t=1610431960828

長岡大学 学生による地域活性化プログラム 各プロジェクト報告書

1. 長岡市撰田屋の魅力高め、観光客を増やし、地域活性化を図る。
～現状の把握と分析～
生島義英ゼミナール
2. 栃尾地域のPRによる活性化：
空き家の再活用による地域振興活動と二十村郷の錦鯉のPR活動
石川英樹ゼミナール
3. 栃尾地域のPRによる活性化：
栃尾繊維業のPRに向けたマスク考案と裂き織りによる商品開発
石川英樹ゼミナール
4. 栃尾地域のPRによる活性化：
フォトコンテスト開催による栃尾地区のPR
石川英樹ゼミナール
5. まちの情報発信拠点「まちの駅」の認知度アップに向けて
鯉江康正ゼミナール
6. 十分杯で長岡を盛り上げよう！
－動画で伝えたい 十分杯と長岡の魅力！－
権 五景ゼミナール
7. データエビデンスに基づいた地域をより良くするための提言
～地場産業・観光を中心に～
坂井一貴ゼミナール
8. オープンファクトリーで長岡を活性化！
栗井英大ゼミナール
9. グラスルーツグローバリゼーション
－草の根・地域からの人類一体化の推進－
広田秀樹ゼミナール
10. 商品開発から学ぶ会計と経営
～伝統文化と現代技術の結晶「みどり繭」を巡って～
喬 雪氷ゼミナール

令和2年度 学生による地域活性化プログラム 権 五景(樂九)ゼミナール活動報告書

【発行日】 令和3年3月30日

【発行人】 村山 光博

【発行】 長岡大学

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

TEL 0258-39-1600 (代)

FAX 0258-33-8792

<https://www.nagaokauniv.ac.jp/>